

96
✓
390

復活代曙光

序言

序

曾て一夜佛陀伽耶なる古塔の下に立て、星斗爛たる大空を眺め、釋佛成道の古を想ふた時、感奮する所があつて、此れから暫くは世間を對して全く沈黙を守らうと決心した事もあつた。然し歸來、我邦の思想界精神界の現状を見るに及んでは、我が思ふ所此儘にして已み難きを感

目

じた事幾度か。近頃楞牛會を起してから、愈此感を強くせしむる事が多い。即ち思ひの馳するに従ひ、言はざらんと欲するも能はざる所を述べ、之を筆録せしめた者、此一篇である。
「學術的精緻は固より期する所でない、只一片の赤心黙し難く抑へ難き者ある事に至ては、天下一人なりとも之を認めて、僕と同じ胸を打つ人があれば、願足れりである。若し又眞の深き惡みを以て、此一篇の表

明治 18 内交

序

白を推破してくれる人があれば、是れ亦至幸である。只種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば用ひじとなりである。

外篇に收めた數篇の文字は、二十八年から三十二年までの舊什中多少本篇の説明に供し得べき者を撮録したのである。固より巨細の點に至ては、所論に前後多少の違ひもあらうが、大體に於て僕の精神表白を補ふべき者である。

明治三十六年十二月下旬

清見鴻にて
著者

復活の曙光目次

目次

一、人生と科學……………頁三

二、科學と藝術……………頁二九

三、藝術と神祕……………頁五三

四、神祕と道德……………頁八三

五、道德と宗教……………頁一一五

六、宗教と人生……………頁一四三

外篇

文學

目次

- 一、ゲーテが「ファウスト」に於ける「マーガレット」の運命……………頁
……………(廿八年)……………三
- 二、現實と理想、現世と詩人、悲曲「サッポー」を論ず……………(廿九年)……………一七
- 三、詩眼に映せる救世の使命……………(廿九年十二月)……………五二
- 四、阿彌陀佛の救世大發願……………(三十年)……………六五
- 五、抒情詩に於ける月……………(三十年)……………八〇
- 六、鬱憂詩人の春愁……………(三十年三月)……………一〇九

宗教

- 一、物質主義の宗教……………(廿八年四月)……………一二一
- 二、邦人性格上の一大缺點……………(廿八年八月)……………一五一
- 三、信仰問題と歴史問題……………(廿八年十二月)……………一六五

目次

雜纂

目次

- シムペンハウエルの性行……………(廿八年九月)……………二三三
- 人生と天然……………(廿九年十二月)……………二五〇
- 現代の社會と諷刺文字……………(三十年二月)……………二五六
- 精靈教……………(三十年一月)……………二六〇
- 餘裕と宗教……………(三十年十一月)……………二七三
- 信仰の一貫と多方面……………(三十年一月)……………二七八
- 佛教方便の觀念……………(卅一年六月)……………二八〇
- 社會に於ける佛教と基督教と……………(卅一年六月)……………二八四
- 日本人の宗教的素質と其將來……………(卅二年十二月)……………二八八

十九世紀最終の基督降誕會……………(廿二年) ……二九七、
 臘八成道會……………(同) ……二九八、

目 挿畫

「バアン、ジーンズ筆王と乞食娘」

今ロンドンのテート畫廊に在り。此處には印刷の都合の爲め、上部と下部とを寫し出さなかつた、原畫者にはすまぬ事であるが、印刷上已むを得ぬ。尙此畫の事は本文の中に説明した。

「サー、ジ。シユア、レーノールツ筆信と愛と望」

オックスフォードなるニューコレッジの會堂の窓で、有名なる stained glass に基督教の七徳を畫いた其の中央の三である。著者は始めはブロックホルストの「信、愛、望」を此處に掲げるつもりであつたが、此は「帝國文學」に與へた故、此の窓ガラスを複製して出す。レーノールツの畫風は十九世紀初の英國風の好代表である。



一、人生と科學

明治
87 1 8
内交

Das Wahre war schon längst gefunden,
Hat edle Geisterschar verbunden,
Das alte Wahre fass es an!

Goethe,—Gott und Welt.

...Yet even in earthly matters I believe that 'the invisible things of Him from the creation of the world are clearly seen, being understood by the things that are made, even His eternal power and Godhead'; and I have never seen anything incompatible between those things of man which can be known by the spirit of man is within him and those higher things concerning his future, which he cannot know by that spirit.

Farady—Researches in Chemistry
and Physics.

人生と科學

人 生 と 科 學

コントが總て我々の思想も感情も生活も、理性に基づいた科學によつて支配せられねばならぬ、といつた其の科學萬能主義は、今尙思想界の一勢力ではなからぬか。雲漢爛たる夜るの空を見ても、我等は今日の星學を讚歎せざるを得ない。彼の星斗の一闪一光は、皆ニュートン、ケプレルの偉大なるを告げざるはない。彼等が此の爛たる雲漢星斗を支配する理法を吾等に發揮してくれた光榮は、決して天の光の榮に劣る者でない。と此積極哲學者が叫んだ百年後の今日、吾等は科學の功績を認むる事には躊躇しないが、其と同時に、彼の如く科學を尊で、却て自然其物と、科學を作り出だした人間の精神とを忘れ、理性、科學を以て人生萬般の事を律しようとする主張に對しては、大に

(3)

(4)

抗議を提出せざるを得な

吾等は固より偉大なる科學者の頭腦の大なるを認め、又其研究の結果に現象世界の奥を探る者のあるのを歎稱する。多くの科學者が天然を観察し試験して、天賦のみならず、物理や、礦物や乃至生物社會の範圍に亘て、其の間に行はるる深奥の理法を吾等に示してくれたいのを感謝する。さりながら、此等の科學研究が、單に外物に此々の理法が行はれておるといふ事を示すのみで、其理法が吾等の精神内容と關係のない外界の認識に止まるなれば、此の如き科學は吾等の生活と相關せざる者である。吾等は科學よりも寧ろ科學が取り扱つて居る天然其物を歎美しよう。若し又コントが喝破した如く、科學は吾等の精神が天然の中に秩序と理法とを發揮するが故に、吾等の精神生活を豊富にする者であるとするなら、吾等は進んで此く天然

復 活 の 晴 光

人 生 と

科 學

(5)

の中に理法を發揮する人間の其理性と天然との間に如何の聯絡があれば、抑も吾等は此の如き科學を有し得るに至つたかを問はなければならぬ。即ち科學が吾等を支配すべきか、將た又吾等の精神が科學の創造者であるかを問はなければならぬ。此間に答ふるは、即ち科學の人生に對する職務を明にする所以であらう。

「人間宗の開祖が、星辰の光彩の中にも其光榮を放て居るといつたの其のケプラーが會て云つた事がある。余の願ふ所は、神を知覺する事である。神は外界至る所に發見し得るが、其れと同じ様に、自分の中に自分の内面にも同じ神を見たいのである。科學の光榮は實にここにある。外界の事實を弘く深く研究して、其を支配する、其起滅の間に潜み流れてある理法を發見するのが、即ち科學の職務であることはいふまでもないが、其理法なる者は、即ち吾等の精神の中に流れ

(6)

復 活 の 暗 光

てある神智と、其の同じ神智が外界に物象として現れてある者と、二者の符合を發揮した、其の發見の發表に外ならぬのである。科學的發見なる者は、即ち其發見者の精神が外物と調を同じくして共鳴し得た結果である。此に於て其發見が科學者に與ふる満足は、外界に行はれて今迄氣のつかなかつた關係を發見し得たといふのみでなく、此と同時に自分自身の中にも新しき精神生活の要素を得た喜びである。大科學者の發見提説で、科學思想の新紀元を作つたような者は、總て器械枝葉の末のみで出來た者でない。觀察實驗は固より彼等の研究をなさしめ、又彼等の發見を證明もしたには相違ないが、此等の研究計畫の基本になつたのは、即ち彼等が精神内に潜てある神祕の聲であつた。通常の意識生活のみでなく、其奥に潜んである靈の聲、神祕の力が働くのは、獨り文學や美術の天才のみでない、科學

者の大なる者は皆詩人と同じ種類の天才である。自分の中にある者と外界との符合を發見し得、又此發見によつて、内心の悦を得る者、ケプラーの如くにして、始めて大なる研究もなし得たのである。

科學は、人の精神が自らの理性を天然の中に發見した者である。

人 生 と 科 學

即ち其根底には人心と天然との共通交感を豫想し、二者の源泉が一つの精神(或は神ともいはう、或は力ともいはうが、兎に角我等の精神の共通根底であるべき者であるから、精神といはなければならぬ)から湧いて居る。其れ故、科學なる者は、多くの科學主義の思想家が考ふる如く、單に所謂客觀的眞理を發揮するから貴いのではない。實に外界現象の根底に横はつて居る大精神を探り、又其と吾等の精神との間に微妙の聯絡交感あるを示し、此に依て人の精神生活を大宇宙的ならしむるから貴いのである。客觀的眞理なる者は存在す

(7)

る。此は無論の話してある。が客観的真理といふ者は、我等の主観生活と關係なしに存在し得ない。少くとも此の如き客観的真理は吾等に無關係で、無價值である。寶玉は其れ自らにして貴重であつても、其の交換價值は、人間の慾望と相合して始めて生ずる。客観的真理の價值は、即ち吾等の精神との交感によりて始めて生ずる。而して此交感孚應が吾等の精神生活を豊富にし、又外界事物の裏に潜て居る理法を發揮し得るのは、實にケプラーの明言に喝破した如く、外界至る所にも、又自分の内にも同じ神が存在して、兩者の根底をなせるからである。

「科學は決して吾等人間の精神を離れて存し得る者ではない、科學は人生の手助けをする力はあつても、之を支配し命令する權力はなし。思想的な生活にしても、社會的生活にしても、人生は總て人間精神

の満足を目途とする。而して其満足の根底は、人々が中に深く自ら省み、自己の中に自己安立の地を獲得し、此に依て神即宇宙精神と交通するにある。此源泉を捕へ得ない生活は浮いた生である、危機に際して忽にして崩壊する。此關係は即ち追々述べやうとする點であるが、兎に角科學は人間の思想生活の發表であるから、此根本の要求の爲に存在し、此中心の満足に使役せらるべき者である。

然るに今の世には、輒近科學が成し遂げた進歩に目眩して、科學を以て生命を支配し、科學以外の思想生活は迷てあるといふ様に考へ、又此考へに従て教育を施す潮流が中々強い。此思潮は一方では理性全能主義となつて、あらゆる神祕、あらゆる信仰を排斥し、人の精神生活を偏局なる外界から得る經驗のみの基礎に置かうとする。而も其實此の如き經驗主義は、自分の經驗を以て人の經驗を迫害し、過

去の經驗而も狭い經驗を以て將來を律しようとする者である。此と同様の思潮は、他方では又科學進歩の結果を利用厚生の道に應用すれば、人生の能事終つたかの様に唱へて、争て實利に走り、實利以外何者をも精神に訴へさせないようにする。此の如き弊風は、物質主義の文明となり、虚榮是れ事とする帝國主義の世界を造り出だす。此等を事實に徴して一々證明する事は別の機會に譲るとして、兎に角今の科學思想若くは科學萬能主義は、益す人間の品位を下しつゝある、人類の大なる光明をかき消しつゝある。

固より近世に於ける科學の進歩は拒むべからざる事實である。又社會や人心に關する研究が物質的科學の方法を適用したゝめに、多くの進歩を遂げ、今まで氣のつかなかつた新關係を發見したことも、固より重んずべきことである。併し此の科學の進歩が、其の結果

の實利的應用を外にして、吾等の思想生活に幾何の變化を與へたか。所謂物質と勢力との根本問題は如何に進歩した原子の研究でも如何に驚くべきラヂウムの發見でも、到底其の根底を突くことができないと同じく、如何なる進化論も實驗心理學も、吾等の精神生活の最根本原動力を明かにし得ないのは、科學者といへども認むる所である。況んや又、吾等の精神上の需要満足、人生の歸趣、此等は到底外面的研究の科學の干渉し得る所でなくて、精神の内面的經驗、根本的需用に訴へなければ解釋し得ざる所である。然るに一時の進歩に驚いて、科學が物質のみならず凡て人生精神の問題を解釋し、これが歸趣を與へると考へる如きは、何たる淺見であるか。吾等は決して科學の進歩を認めず、又これが價值を輕んずるものではない、併し吾等の精神的需要は決して事物を外面から見て、客觀として研究する

様な科學論者の科學に依て満足せられない。内から出た需用はやはり直接内面の經驗を基礎としていなければ満足しない。科學は吾々の經驗や理想を説明し探求する義務を持つが、之を建設する權利はない。今の科學は此關係を顛倒して居ないか。

一 科學の進歩といふことをいふが、所謂新發見、新學説は其の根本を尋ねれば、全く新しいものではない。今まで知れて居つた眞理を幾分か改めるとか、若しくはこれを補ふものが多いので、思想の全然たる變革は決して一發明一學説の突如として持ち來たものではない。例へばダーキンの進化論の如きも、段々注意せられて居つた天體、地質、植物などの變化に關する考をよく證明して、系統を立てたものである。且つ其の説明の如きも、ダーキン一人で一度に完成し得ないで、現に今日も尙疑義百出の状態に居るではないか。又近

くはラヂウムの發見に伴ふ原子構成の考の變化の如き、既に各元素の化合量に關して段々發達して來た考で、理論としては決して新説でない。たとひ此の發見がなくとも、アトム即ち不可割といふ名を有つて居る原子が、讀んで字の如く不可割であると考へた化學者は一人もなからう。化合の状態にて實驗し得る各元素の最小量が即ち原子であるとすれば、此の原子が物質構成の究極の小量であると考ふる事は出來ない。然らば、原子に關する最近の發見も、全く新しい考といふことはできない。況んや又進んで物質の最後の構成が何であるか、といふ問題に就ては、渦環説と球子説とは、吾等の考へてアナロヂーを流動體から取るか、若しくは固形體から取る外ない以上は、此の二説は恐くは永く相調和せず並存する外ない。吾等はラヂウムの發見を大切なることとするが、これによつて一朝吾等の物

質に關する考が一變するとは思へない。

其の他一々例を擧ぐる必要はない。科學上の新發見は、それ一つでは決して大なる力を有しない。物質科學の範圍に於てすら尙然りとすれば、科學全體が如何に進歩したとて、吾等の精神や人生の大問題に最後の解答を與へ得るものではない。殊に今日世間で嗷々として科學の進歩を唱へるのは、一つは今述べた如く淺見にも出づるが、尙一つは發見者自身の虛榮心が些細なる發見を誇大に吹聴するにも因る。近頃の新發見なるものゝ一時は籍々として名譽の月桂冠を與へられたものゝ中で、よく數年後まで其の意味を持續したものがどれだけあるか。反對論者は、長足の進歩が先きの新發見を埋没するがために、此の如く新發見の名譽の壽命が短かいといふてあらう。然し、事實、多くの場合では、疑問半熟の研究が續々新發見と

して發表せられ、其の短かい名譽を維持することを見る。ダーキンの著書が出たために、ダーキンの「植物の變形」が幾何の値を減じたか、ミルの論理書によつて印度の因明が古めかしく無用の長物となり了つたか。況や又ウンツトの倫理書やラインの教育學で、人生の意味が一變し得よう筈がない。

要するに新發見なるものは、大なる思想の發達の一部分として値を有するもので、それ自身で思想變革の力を有するものではない。それ故に吾等は續々として出て來る新發見新學說に目眩して、輕卒にも科學万能を唱へ、人生の大問題をも科學に依て解釋しようとする近世の迷想を斷然排斥する。即ち此の意味に於て科學萬能の夢を喝破するのである。

科學は、吾等の大なる精神生活の一部分として、其の價值と其の

raison d'être とを有するのである。フラーデーのいつた様に「人が萬物の長であるのは、彼れが其内に一つの高い者を有してゐる、即ち精神を有してゐるからで、此精神は即ち神が造つた者の現れの中に、不可見の神の力の表れて居るのを見、又此に依て自分が宇宙に占むる位置と、大なる運命とを知らしむるものである。物理も化學も、乃至生物學、心理學も、皆此不可見の證明として存するのである。然るに世には科學萬能の武器で、宗教を追ひ、美術を局限せんとする一流の論者がある。科學と宗教、理性と信仰、此二つが衝突して、勝は必ず前者にあると始めから假定して、大に思想界を科學主義に風靡しようと思想する人がある。而も其が武器として居る科學なる者は、フラーデーやケプラーの如き深奥なる科學思想ではなくて、僅少なる科學の知識、淺薄なる概括空論に過ぎざるに至ては、驚かざるを得ない。

回顧すれば、一時科學全能の空望が歐洲文明國の人心を振盪した頃には、日刊新聞にも、殆んど信仰敬虔の情を以て、今の時代は科學時代である、將來の宗教が科學宗となるのも指折り數へて期することができるといふやうな論説を掲げ、科學者の起居動靜を報道すること、恰かも教主法王のことを記する程に熱中した事もある。其の空望は果して充たされたか。科學上の新發見は續々として世に現はれたが、發見が進むに従つて、前途の神祕世界はますます擴がつて、分ることが一進めば分らぬとが五現れ、發見が二出づれば、神祕の水平線は十進んできて、今日では偏頗なる科學者すら、科學を以て人事一切を満足せしめ得るとは考へないやうになつた。殊に専門でない一般人士の科學妄信は、一層烈しき失望に畢らんとして居る。何となれば、彼等は科學者の術語を聞て、それが何か神符呪札であるかの

如く、宇宙の奥祕を發らく鍵はこれにあると信じた。然るに科學上の抽象的概念、例へば勢力、遺傳、電氣若くは又所謂 Unconscious Cerebration の如き、もろくの祕密を發見する鍵の如く思はれて居つたが、科學の普及に従て、此等の概念は割合に空漠なるものであつて、事實を説明するといふよりは、寧ろ只詞を以て某の種類の現象に代へたに過ぎない、假定説の便宜の術語であるといふことが、段々知れわたるに及て、科學妄信の失望は一層甚しからざるを得ない様になつた。然るに何事ぞ、日本では尙此迷夢が勢力を占めて居るではないか。通俗科學雜誌の歐文を切り抜いて、其れて科學の進歩と稱し、科學宗の勝利を祝ふ新聞紙の如きは論外としても、而も堂々たる學者、教育家にして、科學の、或は心理、生理のマニフェル中にある術語を縦横に使用して、此れて人生の大問題が解けたと考へて居る人はないか。學

理といふ名を盾にして一も二もなく宗教や、其他あらゆる幽玄の思想を排斥しようとする人が多くはないか。教育や倫理や、人心と社會とに至深の根底を有する事實に關しても、世間は争て所謂新歸朝者だとか、何々博士だとかの新説をさかん事を熱望し、そらして其人等の言説の一二の新術語で萬事説明が出来、又萬事人心を支配し得ると信ずるではないか。吾等は此の如き世間公衆に對して眞面目に警告する、眞理は古い者である、瑣々たる自稱新學説や新學者の言説は決して人心の奥に入り得る者でない。彼等は心を潜めて、ヘッケルが原子といふのも一つの形而上的空想であるといふた言を味ふべきである。吾等は世間が此の如き科學迷信を速に脱せん事を熱望するのである。

もとより、科學者の中には研究に自分の一生を捧げて、高尚なる學

者的性格を具へた人も多くあるが、其の人等の眞摯の研究の断片を聞きかちつて、それに依て直に宇宙人生の祕密が知れつくしたと考へたる科學宗の人々は、其の失望の結果或は極端なる現世論者となつて、人生の安慰を破壊し、或は又全く科學に叛いて利益の奴隸となり、其の功利主義の毒害を實業や政治の社會に及ぼし、或は又歐米の勞働者などでは只管現存制度の破壊に自分の理想を發見するに至つた。一方に於て科學万能の熱が熾であるに反抗して、他方では宗教家は頑固に枝葉の傳承を固守して、それが宗教の真相であるかの如く考へ、人をして科學と宗教とは到底相容れないといふ考を強からしめた。フランスの所謂新カトリック派の人々の如き、此の如き方法を以て科學に反抗したため、科學の成功が怪しくなつてきても、人はその代りに再び慰藉を宗教に求めるといふ考へを起し得ない

やうになつた。彼の國で、政府も教育も擧つて宗教排斥の方に勉めつゝにも拘らず、一般人民は寧ろ迷信的の宗教に安んじて、社會は信仰なき放逸見と頑冥なる愚民との二つに分かるゝに至つた。此の悲むべき状態は今後如何にして救はるべきか、實に寒心の至りである。日本の如き、既に前車の覆轍を踏みつゝあるもの、今にして猛然自ら改めなければ、將來は尤も寒心すべきものである。

一 跡、近世に宗教と教育との衝突、或は宗教と科學との戦争といはるゝ現象は、人間の根本的宗教心と教育、若しくは科學との相容れないために生じたのではない。教會が古の科學に依て定めた世界觀が、教會の傳承宗義となつて今日に及び、それが今日の科學的教育と衝突したのである。それ故に、此の衝突は、多くの場合に、些細なる教育政策若しくは社會政策の問題として現はれて居る。ドイツの帝

國統一後の此の衝突の如き、殆んど政府と僧侶との争であつた。近くは又フランスの教會財産問題宗教教育排斥の如き、共和政府が政敵に對して自分の地歩を固めるための策畧である。されば此の如き衝突のために、教會の勢力が減ずることがあつても、それは決して宗教の衰退といふべきものでない。

「ドイツに於ては、人民は一昧に上に立つ人の意見に反抗する性質が少ない。それ故に其の諸侯國の國教たる教會は、尙其の政治的並に社會的勢力を維持して居る。一般人民は國教に屬するもの即ち正教徒で、其他は異端と心得て、セクトといふことは、即ち國教にあらざる異派として輕蔑せらるる。それ故彼等の宗教は内心のことにあらずして、外面宗旨のことである。随分教育ある人の中には、佛教などに同情する人も少くはないが、而も彼等は改宗といふことを一

つの悪事と心得て居る。これは奇怪なやうであるが、僕が現にドイツに於て屢々經驗した事實である。宗教は、彼等に取つて外面の束縛である、而して青年などの多數は輕薄なる物質主義の科學宗に心酔して、内には何等の信仰もなく、只外面國教に屬して居る。それ故に、苟くも眞面目に内心の満足を求めんとするものは、板ばさみの苦境に陥つて、終には全く國教にも愛憎をつかし、科學にも失望するやうな状態である。近時ドイツにカトリック教が新しい勢力を擴げつゝあるのはその結果である。

イタリアやスバニヤでは、科學に對する失望は、教育ある社會をも動かして、カトリック派の僧侶は、其の隙に乗じて有らゆる方面に勢力を張りつゝある。ロシアでも矢張正統の教會は夙に中等以上の社會の信用を失つて、此等の人々は自由思想といふよりは、寧ろ無思想

に陥つて居る。中以下の社會では失望の結果虚無黨などの勢力を養ひつゝある。

世の科學主義者が否十九世紀後半以後の科學的文明が、教會と宗教とを混同し、坊主を惡む爲に其結果を袈裟にまで及ぼし、一時全盛の科學を以て人心の宗教的需要を迫害した結果、世は教會の守子歌に慰を得る事も出來ず、さりとて又科學の電話は遠方すぎて、聞こえても一向に胸に響かない。日本の學校の現状については、殆ど云ふに忍びない。ドイツなどの教育で見ても、學校の宗教科は形式のみで、理屈としてか、然らざれば奇蹟談として行はれてゐる。教會と樂堂と演劇とは其缺點を補つては居るが、學者で信仰を抱くのはさまりが惡いかの如くなつて來てゐる。教育界思想界は中宇に彷徨の體である。日本の教育者は此等の事實をどう觀察してゐるのであるか。

るか。

さて宗教と教育との衝突で、科學的教育が勝ちを先づ占めた其結果、人の思想生活は落窶になつて、其反對に實利が生命の大原動力となりつつある。固より十九世紀後半以後の物質文明、國際競争は總て科學主義の罪に歸すべきではないが、両者が相助けて今日に至つたのは明である。我邦の國家主義論者が、一方は科學主義、現實主義を榜標して宗教を排しながら、他方で祖先崇拜の宗教を以て人心感化の具に供しようとして居るのは、即ち幾分か現實主義に伴ふ落窶たる人生觀を潤飾しようとするのである。尙此等の二十世紀の文明の評論については別に期する所があるから、此處に略する。

之を要するに、科學は人生の爲に存する。人の精神生活は一部分の科學者の考ふる如き簡單な者でない。天才を狂氣だと説明した

ところで、其狂氣が作り出した作品の、吾等に與ふる感化慰藉の價値は少しも減じない。吾等は科學を重んずる事に至ては、決して人後に落ちないが、其の重んずる所以の主點を異にしてゐる。

科學の歸する所又人生を指導し得る所以の原動力は、フアラデーの所謂 *Invisible* である。今日の科學のみで此職務を十分に果し得る見込が果してあるか。

二、科學と藝術

科學は到底、人生の根本源泉たる資格のない者である。科學の結果なる利用厚生は、多くの場合では却て吾等の精神的需要と反比例になる者である。然らば吾等の精神、殊に永遠の光を追ふてあこがれる情緒を満足せしむるものは、何であるか。「吾等は藝術に依て、無睽無象の觀念界を具象的に臆得し、これに依て永遠の憧憬を満足せしむるのが、人生を豊富にし不動の満足を與ふる最も簡便なる又恐らくは唯一の捷徑であると信ずる。」これ則ち豫言者なく救世主存せざる今日の時勢に於て、人をして人生宇宙の深義に達せしめ、各々安立する所あらしむる所以の易行道である。

今日の人々は多くは藝術を以て單に娛樂の具と心得て居る。そ

科學と藝術

Wer das Tiefste gedacht, liebt das Lebendigste,
Hohe Tugend versteht wer in die Welt geblickt,
Und es neigen die Weisen
Gern am Ende zum Schönen sich.

Hölderlein—Sokrates und Alkibiades.

畢竟美を求むるの心は無窮を追ふの心也。古の人、是の心に悩まされて、而かも是の悩みの中に幸ひを見出せり。彼等にとりては、蒼天は虚空に非ざりき、そこに輝やける星は土塊には非ざりき。あはれ、天の靈光、神の呼吸として美を讚美する能はざる世に生れたる吾等の不幸は、寧ろ海を蹈てトリトンの笛の音を聴かむとかこちたる詩人の恨にもや較ぶべけむ。

(高山樗牛)

れ故に表象としての藝術の意味を知らず、只寫實的に愉快な感じを與ふるものを寫すのが藝術であると考へて居る。そこで藝術に對する二つの大なる誤解が生ずる。第一は寫實的に眞に逼つて居るといふこと、第二には感覺的に快感を與ふるといふこと、それ以外に美術の天職あるを知らない。

ロセッテがダンテの夢を描いた。ダンテの戀人なるベアトリツェが僅かに死の眠より覺めんとして、其の身軀を覆ふて居つた布が揚げられた。ダンテは天人に導かれて戀人の傍まで來たが、敢てこれに抱きつくともせず何か恐るべきものに近よるが如き歩を回らす。天人はダンテの手を取りて、ベアトリツェの唇に接吻して其眠をさまし此の戀人を引合さうとして居る。四邊の色合は温かき愛の薄赤き光にて充ち、ダンテの愛を表する赤き鳥は飛んでベアトリツェの

胸に下らんとす。苟くも愛情の味を嘗めた人なれば、此の作に對して如何に愛が、幽明を隔てゝも、一つの和かき赤き光に包まるゝのを躰得し、殊に其の飛び下らんとする鳥に於て切なる愛情の發表を認め得るであらう。然るに科學的偏見の批評者は、何と此の畫を批評したか。彼等は鳥の色の赤すぎるのを非難した、ベアトリツェの身軀の不自然なることを唱へた。而して又科學宗即ち現世主義の道徳家は、此の如き夢の如き空漠なる、且つ不自然の光を描いた畫を以て、精神衰弱の徵候、即ち現世的の活潑なる生活發展に反對するものとして之を排斥した。

其の外、ジッソーの聖フランシスの畫傳で、焚火の光線に反射がない、又はターナーの夕日に對した海上碇泊の船に、舷門が見えない、又はベックリンのベストの畫で、其中の赤き燭が物理的でない、此の如き

批評は皆寫實の謬見から生じたもので、美術は寒暖計や度量衡の尺度で計るべきものでなく、又寫眞を補ふ道具でもない、吾等の其の物に對して又其の景に接して起すべき必然の情緒を、色や形の方法に依て投射するものであることを考へないためである。詩の言語が吾等の感覺や推論を記すものでないことを、誰れも許すであらう。然らば何故に有形美術は、吾等が感覺のみで得る物質世界の束縛を超越して、直ちに吾等の感情を寫し出し、之に依て吾等の間で、其の言語では言ひ現はせない情緒を交感するのみならず、又凡て此等交感の基本たる而形上の實在世界と交通する器具と爲し得ないか。

美術は現象世界の事物に依て吾等に實在觀念世界を紹介する媒介方法である。吾等に形而上の實在世界を示現し、吾等有限の精神がこれに依て直ちに無限と交通する様にする、是れが美術の職分である。

ある。此の事は別に詳しく論ずるとして、こゝには、其の反對に美術を娛樂の具とする惡見解を破しよう。此の如き見方は寫實主義の必然の結果で、美術は只事物の表面の美を寫すものとすれば、其の美なるものは、どうしても只耳目に愉快な感を起さしむるものとならざるを得ない。畫にして見れば、色合が快濶で其の配合が目を疲勞させないやうにして、而して其の題目も亦吾等の安逸乃至慾望の満足に適當したものであれば、完全の美と稱し得べきである。固より此の如き技術上の巧妙も、美術の美を成す一要素ではあらうが、それだけで美術の能事畢れりとすれば、吾等は何故に多くの場合に於て、分量に於ては恐らくはかれよりも多くの快樂を興ふる、耳目口鼻の慾を棄て、美術につくか。又此の事實は、吾等が現實天然の美に接するよりも、美術作品で見た方が安逸の法であるとして、説明し得る

としても、さすれば美術の中で、壯大或は悲壯の美が單に優美なるものよりも多くの感動を興ふるは何故であるか。單に娛樂の具として、此等の分子は全く不必要ではないか。

此の關係は有形の美術から進んで音樂に入れば、一層明かである。ワグネルの樂劇の出た初めに、一般公衆のみならず、音樂者まで擧つてこれを排斥したのは、或はワグネル樂が在來の文典に據らないとか、或は豫期せざる所に強きデスコードがあるとか、其の反對の理由は、つまり單に愉快な音を聽かうとして安逸を貪ぼる情にワグネルが背いたからである。若し此の理由を以てワグネル樂を排斥するならば、ベートーヴェンの第六以下のシンホニーの如きも排斥せざるを得ないであらう。然るに今日はベートーヴェンに對しては勿論、ワグネルに對する反對も薄らいて、歐米に於ては人は漸く音樂は

の單に娛樂の具にあらずして、襟を正して聽くべき莊重なる天籟であるといふことを知り初めて居る。若し音樂が單に愉快のために貪るべきものならば、愉快な音の組み合わせと、即ち主として共鳴から生ずるハーモニーと、其のつきき工合との機械的技巧の外に、音樂の美は存在しないであらう。併し事實はこれに反して、少し耳のある人なれば、極めて愉快なる俗曲的マーチに満足せずして、寧ろバッハやブラームスの教會音樂の靜かなる而して何か音調以上の天籟を有するものを好む。日本にしても、趣味のある人は長唄の巧みなる末のものよりも、一中や若しくは遡つて元祿以前のうぶなる人の心情に訴へる樂を好むではないか、只華美で調子のよい愉快な樂を好む人は、恐らくは名人の一曲と自働音樂器の一曲とを區別し得ない人であらう。

要するに「寫實ばかりを重んずるならば、美術は不用である。」たとひ寫實といつても、技術家が天然現實の中から某々のつかまへ所を捉えて、これを寫し出すにあらずんば、即ち美術として肝要なる某の要點を得、其他を省畧するにあらずんば、單に快感だけをも與ふることもできない。此の一點の事實から見ても、寫實が文字の如く寫實としては美術の資格なきを證して居る。即ち美術は其の「天然の摸倣」に依て通常の耳目には觸れないある物を現はさうとする職務を有つて居ることを知るに足る。寫實の意味すら此の如くであれば、所謂娛樂の具であるといふ考は全く破らなければならぬ。最も卑近なる證據として、通常の肉慾の快樂を貪る人はそれと正反對に、天然なり人工なりの美を味ふことの少ないものであることを見るがよい。或は快樂論者は肉慾の快樂と精神の快樂とを區別して、美術

の享樂は精神の快樂に屬するといふであらうが、そこが吾等の問ふべき要點で、此の區別に既に大切なる問題が伏在して居るのである。既に精神的快樂といふならば、其の快樂を與ふる原物は、精神を感動する力を有つて居るに違ひない。凡そ交通或は交感と稱する事實は、其の方法媒介の如何に關せず、交感を爲す兩者に何か共通の性能あるを豫想せざれば説明し得ない。例へば本國政府と在外外交官との電信往復で、其の電報が常に暗號なるに拘らず、兩者の其の意味を了解するのは、何に由て然るか。兩方に暗號の原簿の存在して、それに依て互に暗號で意思を通ずるのである。即ち此の場合では、交感兩者の間に存する共通性能は暗號簿である。此の一例が精神の交通に關する説明には餘り淺薄であるといふなれば、一步進んで他の例を示さう。人は毎日他の人と言語で話をして、互に其の意味

を了解したと考へて居る。併し先づ直接に知覺に入り來るものは言語の音聲である。其の音聲が如何に文典の規則に従ひ、又此の規則が電信暗號の如く豫ねて約束で定まつて居るとしても、此の符號に過ぎない言語に依て、吾等が彼の人はかくくゝの考を有ち、かやうくゝに感じて居ると、自分の考に翻譯して、而して他人の心を知り得たと信ずるのは何に因るか。音聲や文典は、直ちに吾等の思想感情ではない、其が一人の心から符號となつて出て、他人の心に翻譯せられ、又場合に依ては同じ感動を起させるのは、其の二人の心が即ち暗號符であるからではないか。例ひ此の暗號が民約論的に何か一つの約束に成るとしても、其の約束ができる其の根底は何處に在るか。若し此の約束が何等の必然の(即ち一つ々々の現象を超えて永遠不變に)共通元素なしにできたものとすれば、其の約束の効力は甚だ疑

はしいもので、或る場合には一方が喜びとして言ひ現はすとが、他人には怒りとして了解せられるとがないといふとを、誰が保證し得るか。暗號電報を往復する前に暗號の打合の必要があるならば、思想交通の初めて行はるゝ前に、即ち言語に關して何等の約束も成立しない前に、そこに今一つ根本の妥協の原因が存在しなければならぬ。即ち言語なる符號に依て、吾等が思想感情の實質を交感し得るのは、先天的原因(約束だとか言語の練習だとか凡て言語を用ふるに先立ちての原因)の存在があるからで、決して後天的約束でできるものではない。人の精神に先天的に共通の性能があつてこそ、凡ての言語が符號として其の交通の媒介と成り得るのである。

○ 此の理を擴めて考ふれば、吾等が某の動物を愛し、若しくは又草花などの天然の美によつて心を樂ましめ得るのは、矢張其の間に、其の

限りに於て、共通の元素が吾等と外物との間に存在するからである。犬が一聲ワンと鳴くのを聞いて、犬を愛する人は、其の感情を知り得る。これは犬を愛するために、常に其の聲に注意する所からして、即ちいはゞ練習によつて始めて現はれる力ではあるが、若し吾等と犬との間に何等の共通の性能がなかつたなれば、恰も暗號簿を具へざる暗號電信の如く、互に交感はできない。暗號を上手に書いたり、又これを翻譯する技倆は、電報往復の練習によつて生ずるが、其の練習ができるのが、凡ての往復に先だつて、先天的の打合せが必要があるならば、犬と人間との交通にも練習が必要であるからといつて、少しも其の先天的共通を否定するに足りない。花の場合もこれと同じで、花を愛せざる人には、花は何等の感動をも與へないが、花を愛することによつて、自分と花との間の先天的共通を開發した人には、花から

出づる色や形や香やの符號が媒介となつて、其の間に精神的交通が行はれる。詩人が「天然は己れを愛する心に對して、酬ひずに居るといふ事を決してしない」といつたのは、此の消息である。花が吾等の感ずるやうな和樂の感情を現に抱いて居るや否やは、吾等の問ふを要しないとある。吾等の方から花に接して其の美しさ色形香によつて、吾等の心に幾分でも樂みを感じずるならば、其の限りに於て花は吾等と同じ感情を有つて居ると、吾等が見るのである。さもなくば、花に對する吾等の愛情は空である、妄想であるといはなければならぬ。單に現象の側ばかりに注意して、其の他に何等の事實の存在をも許さない科學的見解が、極めて些細なる花に對する吾等の感情をも説明し得ず、説明し得ないのみならず、凡てこれを否定して、遂には人間の現實に感じ思ふところをも迷と斷じようとするのは、

この消息に通ぜざるためである。詩人が、月が笑むとか、花が喜ぶとかいふのは、吾等の感情の事實で、而して其事實を否定せず、に説明しようとするには、色や形の符號的現象以上、更に重要なる先天的性能の存在と及吾等と天然との間には精神的交通が存する事を假定しなければならぬ。

○「山も波も空も皆我と吾が心との一部分で、又我は彼等の一部分ではあるまいか」といつたバイロン名言は、享樂にしても、創作にしても凡て吾等が美に打たれたときの感情である。此の感情は決して根據のないものでなく、却て最も深い、天然と萬人の精神とを包括する大なる根據のある感情である。肉慾の罟に陥り、或は利欲の巷に血眼をさらして居るものも、其の心情が一旦美に接して開けたときには、皆此の感情を抱き、又其の感情の大なる勢力に支配せらるゝ。若

し、天然にしても、人事にしても、或はそれが自然の中に認めらるゝにしても、美術に依て發揮せらるゝにしても、吾等の精神が美の對象其のものと共通の交感ができるにあらずんば、此の感情は生じ得ない。吾等が美術作品に依て發表する此の交通は、直接には作品の形式美を通じて作者の精神と交通し、間接には作者の精神に依て作者が感得した、天然なり人事なりの先天的精神美と交通するのである。煩しいやうであるが、反覆して斷言する、彫刻や畫の形色の美、若しくは音樂に於ける音調ハーモニーの美は、此の交通の媒介を爲す媒介である符號である。吾等の精神が感動を受ける眞の源泉は、此等の時間や空間に支配せらるゝ形式を超越したる精神、即ち實在に存する。それ故に美術は娛樂の具でない、深遠なる莊嚴なる實在界と交通する方法である、其交通が吾等の沈思冥想若しくは信仰敬虔に依て成

し遂げらるゝ代りに、形式や音の符號に現はれた美に對する享樂として發表するのが即ち美術である。此の享樂は精神的快樂である、浮薄な意味に於ての精神的快樂でなくて、最も確實なる、最も直接なる意味での精神的快樂である。重大なる問題といつたのもこのことである。

「美の享樂は愛である、肉慾的の愛でなしに、プラトニ的の愛である信仰や敬虔と殆んど相近い愛である。これに依て吾等は肉體、時處に束縛せられながら、其の時處形式の中に、永遠不變の實在を直觀して、直接に精神的交通を遂げ得る愛である。吾等が疑きに美術を以て精神安立の易行道といつたのはこれが爲めである。」

寫實娛樂が美術の相用でないといふことを明かにしたから、是から今一つ進んで其の表象が必要である所以を説明しなければなら

ぬ。併しこれは先きに精神の交感を論じた中に、既に明かに含蓄せられて居つた。吾等の精神は、肉體、時處の制限を受けて此世に生存して居る、吾等の精神はそれ故に時處の形式ある符號に依らなければ、自分以外のものと交通することができない。最も簡易なる思想感情でも顔つきとか身振とか、若しくは言語に依て傳達せらるゝ。而して此等顔や口の言語も、其の中で又符號の符號を使つて居る。「大なる人物、深い思想の如きはもとより、一層感覺的なる味や音の如きも、高い音、軽い味などの如く、物其の物を言ひ現はすに、他の範圍から借り來つた表象を用ひて居る。さすれば複雑なる、激烈なる、深刻なる、遠大なる、幽玄なる思想感情を、形や音に發表して、それに依て其の本の精神を人の肺腑に徹しようとする畫や音楽が、如何にして表象を用ひずに成立し得るか。表象を否認するのは即ち美術の存在

を否認するのである。表象なしに人に快樂を興へ得るものは、恐らくは味感と嗅感と生殖慾とであらう。表象なしの美術否娛樂を要求する人は、畫堂や樂器を破壊して、美味と香水と女色とに沈溺するがよからう。

「科學万能主義に基づいて美術の表象を貶する人は、即ち感覺的事物の外何等の實在をも認め得ぬ感覺主義、物質主義の人である。此の如き浮薄なる科學思想は既に破滅の宣告を科學者自身の中から受取つた。科學が大切にして居る物質説明のための多くの概念も亦表象である、符號である、只、美術の表象の如く直接に人を感動しない實在の表象である。然らば此の科學に依て感情の動物たる人間の生命である美術を否認しようとするのは、人間自身の自殺である。大なる思想を抱いた科學者は決して此の如き美術否定の人でなか

つた。「フーラデーや又はテンダルの如き大なる物理學者は、又大なる神祕家であつた。ダーキンやハックスレーの如き大博物研究家は、即ち微細なる動物の中にも、大なる美と愛との神祕を發揮した人である。荷くも心情あり情緒ある精神の人ならば、いづれのものにも自分と同様の精神の存在を發見して、美の愛に依てこれに同化し、これと交感する。而して美術は出来るだけの人工の法をつくして、此の交感響應の方便を盡すものである。而して其の方便は表象の外に存し得ない。而して表象なる者は約束や方便で出来た假の表象ではない、實在の根底に入て視れば、同じ精神から出である必然の關係を持つてある表象である。現象の中に理想を造り出だすのが美術で、精神の交通によつて、現實を理想化するのが即ち美に懂がるる我等の天性である、人間精神の神祕である。」

此の如き神祕の存在は獨り美術の由て出る源泉であるのみならず、又科學に於ても明かに其の存在を示して居る。先きに科學万能主義として論じた如き輕率なる淺薄なる科學は、日々實驗場や教室で小研究を遂げて小發見に得々として居る小科學者の科學である。『科學の大變革を促し、其の結果一般の思想界をも動したやうな大科學者は、皆單に形而下の研究にのみ汲々なる人でなくて、其の諸の精密なる研究の根底には、宇宙の大神祕に對する深き敬虔の情を有つて居つた人である。』フラーデーが電氣學上又光學上大なる功績のある學者であることは誰も知つて居る。彼れが電氣と光との間に何か融通の關係が存在することに心を潜めて、毎夜蠟燭の光にマグネットの流れを興へて、忍耐なる研究をしたことは、吾等の歎稱せざるを得ない所である。併しながら吾等は彼の人に於て單に此等の忍

耐の研究や、其研究の結果以上更に大に感服すべき點のあるのを見る。即ち彼は凡て宇宙の現象は唯一の神の力が色々に現はれ居るものであるといふ確信を以て、物理の研究によつて、其確信の證明を試みたのである。即ち諸々の力の中に一つの大なる神祕が存在して、其の神祕は即ち世界萬物を造つた神の力であり、而して吾等は神に造られたもの、一として、其の力を認め得るといふ神祕の信仰が斯の物理學上の發明を致させたのである。彼れの物理學上の發見が棄てられる時があつても、化學及物理の研究の最後に言ひ現はされたる彼の神祕の信仰は、永く其の光を保つてあらう。吾等が科學も亦神祕に歸すると斷言するのは、これがためである。

一々の現象の中に遍滿せる神祕を認むる人でなければ、大なる科學者といひ難い。科學が依て以て神祕を探ぐる手段とする一々の

現象を表象と見做せば、其の表象に依て窺ひ知らるべき神祕は、又美術の表象が吾等に教ふる神祕と全く別物ではあり得ない。

三、藝術と神祕

藝術と神祕

美術は表象の方法によつて吾等の精神を時處を超えた實在の世
界と交通せしむる。人の顔色や言語が随分深く感情を傳ふること
は最も明かなる事實で、而かも到底科學のみにては説明の出来ない
不思議である。抽象の議論を避けて、直接に讀者の目に訴ふる事實
を擧げよう。讀者は卷頭に掲げたバアンジロンスの筆に成れる王
と乞食娘との畫を見て暫く沈思冥想せよ。ロンドンの畫廊に懸け
られたる原作の色案配や筆遣ひを親しく見ざる人には、或は印象が
極めて薄いかも知らぬが、併しながら何物か、自分の精神に觸れ來
つたと思ひ得るまで、王と乞食娘との眼眸を注視せよ。

乞食娘は今路頭から王宮につれられて來た。破衣裸足のまゝ、莊

Look at last up to that sovereign light,
From whose pure beams all perfect beauty springs;
That kindles love in every godly spright,
Even the love of God; which loathing brings
Of this vile world and these gay-seeing things;
With whose sweet pleasures being so possessed,
Thy straying thoughts henceforth ever rest.

Spenser—Hymn of Heavenly Beauty.

嚴なる裝飾を以て圍まれたる玉座の一方に据えられ、而して王は自ら其下なる階段に坐つて、驚歎の目を以て此の乞食娘を見つめて居る。乞食娘の顔色は青ざめて、其の凹んだ目は怪しく光を放つて居る。彼の女は俄に王宮につれられたのを驚かないではない、併し其の念頭には一毫の疑懼を抱かず、軀軀は尙玉座に安んぜざるが如き態度を示すも、其の念頭には、今自分が何處に居るかも忘れて、精神が何とも知れぬ不思議の或る者を融合したかの如き状態に居るとは、其の目の落ちついたる怪しき光の中に現れて居る。彼の女は、王が自分を此處に拉し來つた目的の何であるかには考へ及ばない。只王に悪意のないこと、又何となしに王の深い率直なる愛が自分を取まいて居るかの如く感ずるのである。周圍の廣大なる宮殿や、燦爛たる裝飾は、此の不思議なる感情の前には何等の存在をも有せな

い。作者は中々力を盡して此の裝飾を描き、又其の中古的の森嚴なる裝飾は、看者に取つては、此の畫題の中古的特色を感得するに必要なる材料であるが、一旦眼を此の娘の神祕的眼睛に着目するならば、看者も亦此の娘と共に凡て周圍の裝飾を忘れて、只乞食娘と同じ神祕の感に打たれざるを得ない。

讀者は暫く目を轉じて、下に坐して宵を脱いで乞食娘を凝視して居る王の横顔に注意せよ。彼は眩ゆさばかり光を帯びて居る鎧に身を固め、其の膝の間に立て、居る長劔を一たび揮へば、敵國も恐るゝ王である。併しながら、彼は一旦路頭に發見したる此の天寶の美に打たれて、其の人が乞食であるをも顧みず、これを女王、婢にもあらず、妾にもあらず、眞の意味での女王にする積りて、王宮につれ返り、今これに玉座の半を與へて、自分は一段下に坐し、王冠を脱して此の天

より賚つたる眞の女王を見つめて恍惚として居る。其の眼の中には、戀ともいはず、愛ともいはず、さりとして又單に尊敬といふてもなく、自分をも王位をも忘れて、彼の女を見て居る、其の目つきは殆んど神祕の光を放つて居る。

乞食娘が見つめて居る其の目途はいづれにある。王が乞食娘を眺めて居る其の眼光は世の遊冶郎が美人に對する恍惚の如き、私慾的の何等の感情をも現さず、殆んど何物とも知れず此の美の中に現はれ居る或る偉大なる物質以上の神祕を眺めて居る。通常男女の間の愛といふものとは、全く異なる愛の光が兩者の眼によつて畫幅に充ちて居る。凡ての色彩や形状の技術的の美は、此の神祕的の光を此の世界のものとして現はす副方法に過ぎない。

此畫一つで見ても、美術の表象が、到底言語の表明や物質的分拆

で説明のできない形而上の世界を現はすことを知るに足るであらう。分拆していへば、形状や色彩が此の如き職務を盡し得るのは、抑も何等の神祕であるが。パアンジョーンスにして王と乞食娘との間に現はれたる不朽の愛を感得し、而して其の技術が又同じく其の愛に依て感動せらるべき吾等の精神を感動するにあらずんば、此の畫も亦布と色との外に何等の意味をも有たないであらう。美術の表象は宇宙の大神祕が存在するたるために、始めて其の用を爲し、吾等の精神が其の同じ大神祕の中に生活して居るから、始めて美術の表象に動かさるゝのである。

美の享樂は精神交通の神祕である。吾等の精神が美の物象によつて、美の源泉である吾等精神の故郷と交感冥合する時には、其物象は現實の物でなくして、吾等は已に其物を精神化して觀じ、精神の中

に之を融合してあるのである。此意味で今美術は表象であるといふので、即ち吾等に此の美の享樂を與ふる物象は、感覺に訴へらるゝまゝの物象、即ち時處因果に束縛せられて、現實世界の差別相にのみ支配せらるゝ物象でなくて、其が表はす或物の代表媒介である。吾等は又此意味で、主義としての寫實を、即ち決局目的としての寫實を美術の埒外に排斥するのである。

此く云へば、或はかういふ誤解を起し易いであらう。表象が表象で其の目的が寫實でないなれば、現實に吾等の五感特に耳目に訴へるまゝの物を寫さずに、何か摸型の如く影の如く、現實に吾等の感じ得ない夢を寫すほど高尚な美術でなければならぬ。某の野原に草花を摘んである一定の服裝をした一定の顔つきをしたて女を寫すよりも、乙女の原型、肉もなく顔つきもなき形を天上世界から下して

來て寫すのが美術でなければならぬ。一定の複雑なる事情の下に悩み苦しみつゝある血あり性格ある個人を小説や戯曲で寫し出すのは間違ひで、シェリーがプロミシアスの中で詠じた如き、考へ又活きる形の影で、悩みや苦しみの摸型を全く抽象的に寫し出すのが眞の文學でなければならぬ。表象主義の美術家は、事實こゝまで極端に行かずとも、理想から云へば此くあるべきである。然るに美術家に於て、かゝる形の影を寫し出だし、其れによつて美術として成功した人があるか。又此の如き美術作品が出来たとしても、吾等は此の如き作によつて美を樂しみ、美的快感を得る事が出来ようか。かく見れば表象主義の美術論は迷ひである。

此の如き、非難といはうか、誤解といはうかは、多く寫實主義の側から表象的美術に對して加ふる攻撃である。なるほど表象主義とい

ふ名其れ自らと、又此側の作家、或は美論家の抽象的言論が、少し極端に馳せる爲、即ち寫實主義に對して此方の論點が攻撃的に出る時には、一方の極端を示さうとする爲、此の如き誤解を招くのも無理でないであらう。然し此の如き非難は斷然誤解である、或は牽強である。少くとも今こゝに述べ來り主張し來つた表象主義は此の如き意味での表象ではないのである。此點は後に述べるべき宗教の信仰に關しても同様決して具象の現實を離れた抽象的表象でない事を明にしようが、此處には先づ美術について此點を明にしよう。

試に先にバアンジーンズの作品について述べた點をも一度よく玩味してもらいたい。彼の畫は吾等の精神が總ての利害打算、總ての因果考察を絶した大なる融合の愛を表はす者、此點で之を讀者に推奨して、吾輩の美術に關する意見の説明に用ひたのである。然し

彼の畫は決して「形の影」を書いて居ない。先にも述べた如く、其の四邊の裝飾は、柏の木の浮き彫の極めて中古的特色を有する者を殆ど *painfull* といふべき程寫實した者である。又此娘の憐れげな服裝や、王の甲冑、刀劍、乃至乞食娘の手つき、足の据え方や、王の毛髪まで、全く現實世界の乞食らしく若くは王らしき外装や態度を、忠實に具象的に寫し出してある。若し此畫にして此等の形狀や色彩の具象的描寫を缺いておつたなれば、此の畫が書き出してある中世紀の質朴なる氣風、乞食娘と王との關係的位置を如何にして看者に印象し得るか。而して此等の周圍の光景や人物の態度を書き來て、其の最後の畫龍點睛、此畫の神祕の中點ともいふべき二人の顔つき、眼つきに至ても、決して空の人物でなく、肉あり血あり呼吸ある現實世界の人物のものである。こゝまでは寫實主義なる者とバアンジーンズの

作及吾等の美術論の同伴し得る處である。

ところがジョーンズが周囲の光景に書き出した柏の木彫り裝飾は何の爲に其處に存在するか、彼れは此等を、某の彫物師が彫み、某の宮殿に据えつけられてあつた裝飾其物を寫し出だす爲に畫いたのではない、即ち其實物を寫生して、其れて能事終れりとして居つたのではない。此等は總て此畫の中に中世的空氣を漲らせる爲めて、其中世的空氣に看者を引き入るゝのは、即ち此畫の中心なる乞食娘と王との心情の奥を呼吸せしむる爲に外ならぬ。此と同じく、娘や王の服裝乃至眼眸は一つとして其呼吸の一點に集中して居らぬ者はない。而して其處に中心として書き出された二人の眼眸は、其の現實の筋肉の收縮し方や皮膚の色合によりて表はれては居るが、其れは肉や皮を畫く爲のみでない、實に此肉に依て其皮を通して二人の心情、二

人の間に呼吸相通じて居る其神祕を書き出だす爲である。此なしには作者も満足しない、看者も此畫に打たれない。それ故先づ此畫を見て、初には四圍の裝飾に目をつけて、燦爛たる其光景に見とれる看者も、見てある中には自ら畫中の人物と共に四圍をも服裝をも忘記去て、一念、女と王との心情の中に入てしまふ。而も抽象的に二人の心精を分析して知解するのでなしに、此四圍の空氣に圍まれ、此時の事情に感動せられ、二人の顔つきから其心に入て、而して身は畫中の人となり、其人々の内心の愛と相呼吸し相感するのである。此感應の神祕は、畫中に極めて具象的な描寫、極めて寫實的な色彩と其配合集中とに依て得られるので、決して、形の影で得るのではない。

此と同じように、ジョットのフランシス傳も、其の忠實なる人物や四圍の描寫によつて、フランシスの信の力を吾等に傳へる。其火の

光に反射がないのは、(一頁參照)此場合には畫中の人の心裏、熱あつて光なき爲である。ジッソーは火に光のあるのは知てゐる、光を畫いた事古今無雙の詩人なるダンテの親友ジッソーが、火に光のあるのを知らない筈はない。然し、此處に寫實を以て能事終れりとして、物象を其儘に寫すが美術と心得て居る作家や美學者の味ひ得ぬ秘密がある。即ちジッソーは、此畫で只暑い火を感じて居る人の心を書いたのである。聖フランシスは火教の僧侶に對して、汝等若し神の此聖書よりも火を尊しといふなれば、汝の身を此火中に投ぜよと迫つた。兩者の判者たる王は、火教者に直に火に入る事を命じた。而も火教僧は面を火に背けて恐れ慄ひて居る。他の人も此一場の光景に打たれ、今彼れの身が火に入つたなら、どうであるかと、心の中から戰慄してゐる。此一場の活劇に、火は中心である。然し光の火で

なしに、熱の火が此活劇の中心である。此場合に、此活劇を目撃する人があるとすれば、さうしてジッソーは即ち看者をして之を目撃せしむる爲に此畫を書いたのである、何人も火の光を見ずして、只其熱を感じるであらう。火の熱と聖フランシスの信の力と、此の二つが此畫を作てゐる。其れ故にジッソーは、火の熱を畫く爲には、火をも四邊の人々の面にも、總て熱を畫いた。看者をして視覚から熱を感じしめようとしたのである。物理の説明の爲に火を畫いたのでない。此の如き畫は、世の偽寫實家の感じ得られぬ處であらうが、火の熱とフランシスの信とを、其のありの儘に畫くには、此くあるより外に方法はないので、ジッソーは其れ故に眞正の寫實家である。而して其の寫眞の具象的描寫が、よく看者をして畫中の人物と呼吸相應せしめ、神相通せしむるのである。此に於てか知る、眞の表象は即ち

眞の寫實で眞の寫實は即ち又眞の表象である。

此外此關係は、ダンテの夢についても、ターナーの諸傑作についても、近くはベクリンの怪物畫や、芳崖の觀音についても、十分に立證し説明し得る。文學上の作品についても同様で、當時の歴史なしには、シルレルのワレンスタインも其の悲壯の意義を失はうし、近松の心中物も、現實の義理人情を畫かずには、戀や情義の活きた表象とはなり得ない。

○要するに、美術の美は天然の美と同じく、現實によりて理想との交通をなさしむるのである。其が畫き出す現實は、一分空影を交へるのを許さない。一に忠實なる天然の摸倣でなければならぬ。只其の天然を、單に五感に訴へるまゝに、物理的天然として摸倣するのでない。眞なる深い「天然」の真相を畫き出だし、而して吾等の精神をし

て其の「天然」の中心精髓と交感道交せしむるのである。此故に眞の寫實と實の表象とは相離れ得る者でない。今の寫實主義の如きは畢竟空の寫實主義で、天然に不忠實であるのみならず、吾等自らの精神を欺く寫實である。美術を科學で分析し、或は他の極端で美術を娛樂の具とする如きは、つまり此の自欺から生ずる迷ひである。

今迄は耳目に觸れ得べき美術に依て、忠實なる「天然」の摸倣は即ち表象に存し、而して此表象は即ち吾等精神の神祕的交通の方法媒介である事を明にし來つたが、此れから尙他の方面に此と同様の神祕を求めよう。

「精神の交感孚應は、即ち此世にある總ての美しい者、善き者、眞なる者の根底である。此神祕があるから、吾等は美しい者を好み、善き者を愛し、眞なる者を尊び得るのである。又此神祕の根底があればこ

そ、美しい者、善き者、真なる者が此世に存し得るのである。此神秘、此根底を外にして、美を論じ、倫理を談じ、哲學を議するのは、無用徒勞である。」

「吾等の現世生活の精神は此の如きの表象に依て他の精神と交通し、表象に依て實在世界と交通する。此は獨り美術のみでなく、信仰の愛によつて直ちに神なる精神と吾等とを結びつくる宗教も、亦此意味での表象を要する。佛陀が彼の時、彼の國に現はれて、目觀るべき身體に依り、耳聽くべき說法に依て、彼が内心に悟得した絕對の眞理を宣布しなかつたなれば、即ち其の眞理が具體的に佛陀の人格に現はれなかつたなれば、煩惱具足の人類は寂光界の理想に依て安立の地を得なかつたであらう。後世の佛徒が、佛陀を以て單に肉體五十年の生命を有した一人の教師と見ずして、常住なる眞如法身の一

つの現はれと信じたのは、即ち佛陀なる具象的一人格の表象作用によつて、吾等の精神が無餘根本の精神と交通し得たのである。」其の根本の精神が果して何者であるか、其の信仰が今後も尙世界の人心を支配し得るや否やは、今の問題以外である。吾等は只佛陀なる有限の一人格が、絕對精神の表象となつた爲に、偉大なる感化を及ぼし得たことを過去現在多くの信徒の内心に經驗する事實として認むれば足る。

「キリストに於ても亦同様で、彼は實に「人の子」の代表である。神を父として、其の愛の中に我を没し、我の中に神の愛を體現する「人の子」が肉あり血あり情あり涙ある一人の人間として現はれたので、即ち彼の人格は神の愛の具體的發表で、彼の傳記は即ち「神の子」の表象である。」千九百年の前にナザレの大工の子として生れ、多くの人には

狂氣として貶せられ、最後に十字架上に殺された一人の狂熱家の人物が、何故に眞に「神の子」たり、又代表的に第二のアダムなる「人の子」たり得るか。歴史上のヤンなる人は果して四福音書の傳ふるが如き、又特に第四なるヨハネ傳の解釋するが如く、永遠なるロゴスの肉となつたものであるか。吾等は今此等の歴史的問題を吟味する必要を認めない。只此の信仰が殆んど二千年の間、幾億の人心を支配して、其間に多くの奇蹟聖史を産み出したといふ事實を承認して、而して其の多くの驚くべき信仰と事業とを産み出した源泉は、決して空虚でなく、キリストなる一表象によつて、神の愛が世に現はれ得たことを、不思議として認定すれば足りる。

「不思議だとか神祕だとかいへば、今の科學熱に浮かされた人々は、これを排斥して迷信と斷ずるであらう。所謂神祕の信仰は只現象

のみを見て、それが基づく所の實在を求むることを知らない人の目には、迷信と映ずるであらう。好し迷信と許しても、迷信といふ概念それ自身が甚だ空漠なるものであることは假りに捨て、置いて、其の迷信が大なる力を産み出すことは事實である。科學主義、現實主義の人は此事實の原因を如何に説明し、此力の根底を何處に求むるか。

近くはナポレオンがフランスのみならず全歐洲の人心を震盪して、其の一舉一動が幾萬の人命を支配し得た時に當つて、フランス人は彼を何と見たか。「人」(homme)と稱した。彼れは此時に當つて、一人の人間でなくて、人類全體を總括し代表する「人」のものであつた。フランス人は、彼れの人物に於て、人其の者の表象を認め、其の「人」の中に大なる力の發表を見たのである。即ちナポレオンなる一つの具

昧的な人間が、人の表象として、恐れと喜びを以て、人の力の如何に大なるかを感得せしめたのである。此の信仰はフランス人の迷信であつたかも知れぬ。併しながら、此の人は人々の爲に破られ、歐洲の活動から退き、其を代表した肉體は、遂に絶海の孤島に憤死した後にも、彼れは生存するてはないか。之に反して彼を破つた人々の力は今日幾何の人心を動かし得るか。フーターラーの古戦場に記念尖塔の上に立つて、其の昔を回顧する吾等の胸には、彼の人々の力が感ぜらるゝか、若しくは彼の「人の力を回顧するか。」ナポレオンを破つた人々は、破られたナポレオンの「人に較ぶれば、影の如く泡の如きものである。ナポレオンは死しても、彼が表象し代表した人は死なない。さすれば永遠の生命と不窮の力とを蓄ふる實在の人は、何時でも、又いづれの處に於ても、彼を想ひ彼の力を色讀せんとする人の

胸に現はれ来る。」フランス人が此の「人を神の如く畏敬したのは果して迷であるか。

「ナポレオンは死んでも、人は死なない、釋迦の骨は砂の中に朽ち果てても、佛陀は今尙存在して居る。ヤンは二千年の過去の人であるが、神の子たるキリストは、今も此處で吾等の精神と交通し吾等の精神を活かし、吾等の精神の中に生きて居る。」只吾等は此の永遠の「人や、佛陀や、神の子を、抽象的に單に思想の産物として發見し捕捉することを得しない。哲學思想や科學の研究は、此の捕捉、此の交感の土臺を築き、階段を興へるではあらうが、直ちにこれを此の生命の中に實現する力はない。又此神祕を叙述し説明するが哲學や科學の職分であつて、之を破壊し或は造り換へる事は不可能の事である。吾等の精神の中に永遠の實在を現はし來るには、矢張具體的に時處の

關係を有する表象を要する、現世に於ける吾等の精神はどうしても、時處の束縛を脱して考へ乃至働くことができないから。

されば表象は美術の生命であるのみならず、又宗教の生命である。即ち肉體の中に活き社會に生息して、どうしても現世の束縛を脱し得ない吾等をして、其の現世に住みながら、具象局限の現象の中に又其れを通して、一切の變化差別を超えて不變なる實在と交通せしむる凡てのもの、生命である。即ち表象は此の交通の媒介であつて、表象が此の如き媒介の職務を果すことが即ち神祕である。キリスト教なり佛教なりの中で、神祕的思想に入つた人は、色々の方法で其の神祕的直感を試みたが、要するに表象の神祕力を利用するのが眼目であつた。或は胸の内に十字架を刻み、或は眼前に聖母を見、或は一呼吸の間に宇宙大我の呼吸に接し、若しくは拈華微笑の中に涅槃

の大祕に到達したのも、何か一つの表象を通じて大なる精神と交通したのである。箇様にいへば、又人は迷信と評するであらうが、音響の表象が無形の思想感情を傳達するの神祕を考へたなれば、此等の宗教家の經驗した神祕は敢て不思議奇怪ではない。寧ろ所謂健全なる常識を有する人々が、時々刻々用ひて居る言語の神祕を不思議と思はない方が、却て大なる不思議ではないか。神祕家の眼から見れば、一切の事物は大不可思議であつて、而も不思議でない、至當の事實である。

常人の眼は日常接觸する事だけは、これに慣れて其の神祕に思ひ到らず、それ以外のものを怪事不思議と稱するのである。吾等は凡ての物を不思議とするか、若しくは又凡ての物を不思議でないとするかの二つの道を有つて居るのみで、半分は不思議、半分は不思議で

ないとする人の曖昧に甘んずることはできない。何物に接しても其の中に不思議を見るのは神祕の初歩である。眞面目なる科學者はいづれの事物にも不思議の存在を認め、大なる思想家は半途曖昧の解釋によつて神祕を拂ひ去ることを肯ぜざる人である。一切の植物の中に不思議を發見したればこそ、ゲーテは其の植物の變形を作り出した。ニュートンが林檎の落ちたのを見て、日常怪むを要せざることとしてこれを看過したなれば、彼は近世物理学の開祖となり得たか。ファラデーが若し單に實利的應用を以て科學の能事とする物理學者であつたならば、光と磁氣との間に存する融通の關係を發見し得なかつたであらう。

吾等の思想が一旦一切事物の神祕に氣をつけて、これを探究し始めたなれば、凡て耳目に接觸する所のものは不思議たらざるなきに

至る。而して此の一切不思議の中に大なる精神常住の實在の現はれを認め得るに至れば、今までの不思議は至大なる光明の裡に攝せられて、恰かも一切萬物が或は青或は赤、各其の色に従つて一つの太陽の光を現はすが如くならう。此に至れば、不思議は不思議でなくして、凡ての物が眞の永遠なる智慧の裡に照らさるゝに至る、是れ即ち神祕の至極である。此の境に入れば、今まで自明的の事實として、最も確實なる現實として見て居つた現象界は、却て影の如く其の實在を失ひ、今まで過境的の遠い不確實の空闊の如く見て居つた不可知が、却て最も確實なる實在となつて、現實の事物は此の實在の光明に依て始めて存在と活動との權利を得るようになる。かういへば、何か空漠なる空理を談ずるやうであるが、凡ての科學も、要するに此の如き確實の光明に依て吾等の知識を整頓しようとするものであ

る。

一般の人の考へては、例へば動物に關する確實なる事實といふのは、犬といふ動物、馬といふ動物の存在で、其の犬といひ馬といふ中にも、某々の個々別々の犬馬の存在である。人は自分の家のカメを呼んで犬と考へて居る、而してカメの存在の方が「犬」の存在よりも確であると思つて、只現象の一面に拘泥して居る。然るに彼等はカメが死んだからといつて、犬がなくなつたと思ふか。此の點で、既に常識は自ら破壊して居る。又カメの生きて居る間にしても、其の主人がこれに食物を與へ、これを犬として待遇して居る其の凡ての動作は、「犬」といふ一般の概念によつてカメを待遇して居るのである。それから一步を進めて一般の人が、常識的に犬とか馬とかいふ存在を知つて居る、其の知識と動物學者が動物進化の順序に依て整へた分類

法に基づいて、犬や馬を脊椎動物の一として認識して居る知識といづれが確實であるかを比較して看よ。而して動物學者の知識の方が常識よりも確實であるといふ、其の理由を考へて看よ。現象世界が實在の光明に照されて、初めて眞の存在を得るといふ神祕家の經驗が決して空でないといふことを知り得るであらう。

「常人の覺めたる所は賢人の夜である、賢人が暗黒と見るものを常人は光明と考へて居る。」太陽も照さず、星も月も又彼の電光も輝かざる其處に存する火は、果していづれより來つたか。一切の物は此の輝けるものゝ反影である。此の物の光りに依つて宇宙は照されて居る。固より吾等は特殊存在の現象を空である暗であるといふのではない、只根本の常住の光に照さるゝにあらずんば、吾等は此の現象の眞相を見得ないといふのである。此の意味に於て神祕に到

達した賢人の晝が常人の夜であることを憫むのである。併しながら其の常人の夜も神祕の光に依て、忽然として賢人の晝と轉じ得ることを主張する。凡ての現象は日月や電光の光である、それ等の光が別々に存在せず、却てそれ等の光が供給を仰ぐ其の源泉の光に著目するの必要を主張するのである。

美術の力も、宗教の感化も、凡て表象によりて表はるる此の神祕の力である。此の表象の力を認めることは即ち神祕に入るの源で神祕は即ち一切眞善美の源泉である。

四、神祕と道德

現象世界の根底を探る科学や哲学も、観念世界の美を吾等に發揮する美術も、遂に皆一つの神祕の中に歸着する。其の神祕は即ち吾等の精神と精神との交通、及び精神と外界との交通を可能ならしむる根底である。先きにも述べた如く、一切萬物が同一性質を有つて居るのみならず、實に唯一の共通なる源泉から生じたものと見なければ、凡ての精神の交通、物質の相互の影響が生じ得る筈はない。此の根底を稱して或は形而上の實體といひ、或は佛教の如く眞如と名ける。此等の差は只名稱の相違ではあるが、其の相違の由て起る所は、人々が因て以て此の根底を認め、又此の根底の實在に對して自分の方からの活動を向ける其の關係に依て違つてくるのである。實

神祕と道徳

Ἡ ἀγάπη οὐ ζηλοῖ. Ἡ ἀγάπη οὐ περπερευεται, οὐ φυσιοῦται.

Τότε δε προσωπον προς προσωπον.

Τότε δε ἐπιγνωσομαι καθως και ἐπεγνωσθην.

Paulus-Cor. A. XIII. 4 & 12.

愛は妬ま
愛は誇ら
傲らず。
さて其時
は面のあ
たり相見
たり相見
さて其時
は我が知
らるゝ如
く
我れ知ら
らん。

ホーロ、

コリント前書

十三章四と十二

Wie die Sonne lauter
strahlt mir sein Licht:
der Reinste war er,
der mich verrieth!
laut'rer als er
liebte kein and'rer:
und doch alle Eide,
die Verträge,
alle treueste Liebe—
trog keiner wie er!—
Nicht Gut, nicht Gold,
noch göttliche Pracht;
noch heuchelnder Sitte
hartes Gesetz:
selig in Lust und Leid
lässt—die Liebe nur sein!—

R. Wagner, — Götterdämmerung,
Brünnhilde が最後の詞

在といへば一切の差別變化を超越した不變不滅の死物の如く聞える、眞如といふも亦然り。吾等は此等の形而上的概念に對して今批評を試みる必要はない。何となれば吾等が今此の根底を發見し來つた根據は、主として精神の交通といふ一點にある、殊に美術に依て得らるゝ精神の交通を基として、其の精神交感の根底が必要なることを認めためたのである。それ故に此の實在に對する吾等の概念は、美術に現はれたる美が現象世界の思想言語には不可稱不可説であるが如く、神祕といはなければならぬ。嘗に其の概念のみならず吾等の此の神祕に對する關係態度は、有らゆる種類の表象に依て、これと精神的交通を遂げ、吾等の小精神を此の大神祕の中に遊ばせようとするのである。それ故にこれを稱して神祕といひ、又強いて名をつけければ、宇宙精神或は大我とても稱せざるを得ない。

吾等が神祕の中に精神を遊ばせる状態は、總ての世間の利害得失は勿論、世間の思慮活動を超えて、時處因果の外に優遊するのである。此の如き優遊は現世の生活では最も明かに美の享樂に現はれる。それ故に此の状態を稱して美的優遊と名づけるのも不當ではなからう。

吾等をして神祕の中に優遊せしむるに至つた媒介が、科學であつても、或は美術或は宗教であつても、其の境に入つた人の精神は、神祕の精神と交通し融合し、今までは神祕を認むる媒介の表象として居つた現象の事物を、今度は其の神祕の光に依て透見するやうになる。一つの木の葉から反射する青い光に依て、太陽の光線の中に青の分子があることを知つた吾等は、今度は太陽の大なる光の一部分として木の葉の青光を見る。自分が同情し深く愛する人との精神交通

に依て、其の兩人の間に行はるゝ愛の根底が神祕の大精神から出て居ることを感得した精神は、今度は大なる愛の一つの發表として自分等の愛を感じ、自分等の愛は只偶然に起つて來て此の世界の束縛に制限せられて居る生滅の愛ではなくて、大なる愛の一つの波瀾が、自分と自分が愛して居るものとの間を流動して居ることを感ずる。此の如くなれば、自分が接觸する所の凡ての事物、凡ての人物は、皆自分と融通の關係を以て共通の根據に立ち、同じ一つの神祕の内に生活して居るのである。何物として自分の精神と交通し得ざるものはない、如何なる制限の下にも、時と處との殘酷なる壁に隔てられても、此の精神の交通は妨げられない。天然に對すれば天然の愛となる。花が匂ひ、鳥が歌ふも、自分と共に匂ひ歌ふのである。雄大なる山嶽に對しては、自分の雄大なることを其の山の顔に於て見る。恐る

べき暴風雨に對しても、其の猛烈なる威力は即ち自分と同一の威力であることを感得する。況んや人に對しては、此の交通は一層明かて、親子、夫婦、朋友、一切の愛は、皆同一精神の愛に歸して、愛する人に對すれば、即ち自分の影を認め、惡むべき人に對しても、尙其根底に於ては同一の心情の存するを見、同一の愛が彼等を感化し得ることを強く感ずる。宗教家や詩人が、天然や人間に對する愛を教へ又歌つた多くの實例は、今こゝに列擧する必要はない。キリストが野の花、空の鳥に對しても、天に在せる父の愛を感得した其の愛は、アッシシのフランシスが狼に對して、汝兄弟よといつて説教をした其の愛と同一の愛である、又吾等が此等の愛に同情して、此等の人を愛する愛と同一の愛である。神祕の中に優遊する精神に取つては、一切の事物皆我ならざるはない。これを稱して無我といふも、若しくは大我とい

ふも、少しも差違はない。利己だの利他だのいふ紛々たる差別見解は、此の無我即大我の愛の中には消滅して了ふ。

此の如く神祕の中の優遊を愛として主張すれば、世の論者は愛に偏したる、正義の概念を缺いた、柔弱なるセンチメンタリストの詞といつて非難するであらう。然り、此の愛の中には利己もなければ利他も存しない、善悪だの正義だのいふ考は跡形もない。凡ての物の中に自分を發見し得るならば、其の限りに於ては自他の區別はない。然らば、如何にして彼は善であるが故に賞すべく、惡を爲したが故に罰すべしといふやうな、正義の判断が起り得るか。况んや又世間の毀譽褒貶につれられて、人を判断し、若くは又自らこれに關心するやうなことがあらうか。神祕の中に優遊する精神に取つては、世の善惡は影である。インドの哲學や佛教が「徳と過とを棄てし」(Punya-

pāpe vihāya)とシヒニーチが「善惡を超えて」(Jenseits vom Gut und Böse)といつた状態は、即ちこれである。

思慮の鎖を断ち、一切の疑念を解き、而して最上の神祕を見たる人は凡ての業を滅す。(ムンダカ二ノ二ノ八)

善惡の二つ、報土往生の得ともならず、失ともならざる條勿論。

……善人なをもて往生をとぐ、况や惡人をや。……信心の行者には罪惡も業報を感ずること能はず、諸善も及ぶことなし。

(歎異抄より抜く)

善不善爲二、若不起善不善入無相際而通達者、是爲入不二門。罪福爲二、若達罪性與福無異、以金剛慧決了此相無相無縛無解、是爲入不二門。正道邪道爲二、位正道者、則不分別是邪是正、離此二者是爲入不二門。(維摩詰經入不二門品第九)

此等の言は、此の神祕の状態に入つて一切の中に自分を見、自分の内に一切を感得した古聖賢の深き實驗である。優遊の至境に遊ぶものは皆此の經驗を得るのである。高山樗牛が美的生活論に於て、「雲の無心にして岫を出て、麋鹿の歩のづから溪水につくが如き、本能的の生活と稱したのも、根底は即ちこゝに存して居つたのである。かくいへば、世の論者は嗷々として、此の如く道徳を無視する見解を危険である、空想であるとして排斥するであらう。吾等は此等の論者に對して、先づ問いたいのには、彼等の所謂道徳とは何物であるかといふことである。彼等が此の間に答へ得たならば、それから進んで、吾等は此の善惡超絶の美的優遊、即ち神祕的の愛が如何に吾等の生活を支配し得、而して此の愛の中には春風秋霜兼ね備はる攝折の二面の活動を明かにし得るであらう。

自利にしても利他にしても、或は又功利説若くは進化的倫理説にしても、其の目的とする所の大小高下の差別はあるにしても、大多數の人の常識若くは倫理説は、要するに利益といふことに歸着する。純然たる直覺的の倫理説は、殆んど世に容れられず、直覺主義と稱する人々にしても、其の直覺の由て出づる所の念慮には、個人とか家族社會乃至人類全體の利益を眼中に置いた良心を以て倫理の基礎と考へて居る。利害の打算、即ち個人なり社會なりの都合によいかわるいかといふことが吾等の社會的生活の目安であるといふことは、殆んど凡ての倫理學説の根底になつて居る。そこで道徳と社會生存の好都合といふその間には、何等の區別も存しないかの如く考へられて居るから、道徳といへばどうしても、第一には目見るべく手觸るべき現世的社會の繁榮と、第二は其の社會の平均の標準とに束縛

せらるゝ。其の二つの制限の下に都合のいゝ性質を有ち、其の制限の下に都合よく調子を合はせて活動する人は、世の所謂健全なる道徳の人である。

そこで假りに社會人類の進歩が人類生存の唯一の目的であると許した上、此の如き道徳が、果して凡て人類進歩の原動力であり得るか。これが吾等の第一の間である。社會の進歩は學術知力の進歩に伴ふといふ説に従つた所で、知力上の大なる進歩を促したやうな變革は、果して現世的の思想家のみから出て、神祕は其の間に何等の力をも添へなかつたか。若しくは又社會の進歩は感情の馴致即ち服従とか協同とかに適する感情に基くといふ考に従つても、此の如き感情の馴致が古來宗教の助けなしに全社會に及んだ例があるか。平凡なる科學の進歩即ち新發明新發見と稱せらるゝものは、先きに

述べたが如く、一時の利用厚生の道に應用せられた以外、更に人類の生活なり又思想なりに偉大なる効驗をなしたといふことは到底許し得ないことである。思想上の變化で、人類の一變革を爲した著しい例といへば、恐らくはソクラテースが、人間はそれ自らにして目的たらざるべからずと教へた自律的道德であらう。ソクラテースの此の教は、人間の生存目的が單に物質的現世的の範圍に存せざることとを明かにしたもので、キリスト教が歐洲諸國に入り得たのも、此の前驅の力與つて多きに居る。而して此のソクラテースは學説に於てのみならず、信仰人物に於て人間の精神的本位を深く探つた人である。其の弟子なるプラトーンが深い神祕家であつたのも、師の跡を結果まで追つめたに外ならぬ。ソクラテースの道德に今の所謂都合道德と大に異なる所の者があるのは、今日の倫理學者が多くソ

クラテースを難有からざるに依つても知らるゝ。それから後にルネーサンスの思想、宗教改革時代の思想など、人類の運命に大關係を有つたものは、いづれとして其の當時の社會の都合に反對し、其の道德の現状を破らうとしたものである。若し此等の運動の先達が社會の束縛、常識平均の判斷を以て道德の至極と心得て居つたなれば、即ち御都合倫理説の道德なるものに從つて居つたなれば、到底彼の如き大なる結果を生じ得なかつたのである。近い例を取つていへば、星亨の暗殺者を批評した倫理學者が、其の暗殺を非認した理由は、暗殺の動機の如何に拘らず、其の行爲は法律の禁ずる所を犯したものであるから、悪であるといふにあつた。此の特別の場合の是非善惡といふことは暫く別にして、此の如く現存の法律制度に背くものは、凡て其の理由に依て非認すべきものであるとすれば、此の如き判斷

は倫理學者から聞かずとも裁判官が已に下してある。ソクラテースは悪人であつて、そが死刑に處せられたのは至當の罰である。法皇の命に背いたルーテルは勿論悪人である。此の如き道德のみが世に行はれるならば、世は太平無事であらうが、人類の進歩の歴史は全く其の光彩を失つて、吾等は今日も尙會長を戴いた遊牧人民の狀態に止つたであらう。利益を目安にして、それが爲に社會の傳來風習に從ふことを重んずる倫理説は、却て進歩といふ利益を滅すものであつて、自殺的思想である。

又暫く思想といふ點を離れて、服従や協同が社會進歩の原動力であるとするれば、其の服従協同が凡ての人を感化し、凡ての人に行はれた曉、即ち凡ての人が所謂善人となつた曉を考へて見よ。服従する人あつて指揮する人はない、協同する人あつても協同を支配し、又

場合によつては協同を破つて新しき光を持ち來たす人はなくなる。此の如き善人の理想が果して社會の進化を助けるか。凡そ眞の服従といふことは壓制に盲従することではなく、自分の意志を自分より大なる意志の一部として働かせることである。此の如き服従があつてこそ眞正の社會的協同も生ずるのである。されば服従協同の眞義は、我といふものゝ自覺に基かなければならぬ。自覺なしの服従は奴隸根性である。此の如き服従を奨励する道德は奴隸道德である。既に自覺がある服従といふならば、其の服従を生ぜしむる意志と意志との交通が第一義でなければならぬ。自覺の明かな意志なしには、協同も眞の協同でない、眞の協同は即ち奴隸根性の反對で、意志の獨立を要する、而して意志の交通は即ち精神の交通で、此の交通は即ち吾等の稱呼する神祕である。然らば神祕の基礎なしに

は、服従協同の道德も到底行はれないではないか。

ユダヤに姦通した婦人があつた。ユダヤ人はこれを捕えてキリストの處につれて來て、如何にこれを罰すべきかを問ふた。ユダヤの法律で、姦通した婦人はこれを市にさらして、人々がこれに石を投げつけるのを罰とした。キリストを圍繞して居る市民は、手に手に石を取つて、今や宣告が下ると待受けて居る。僧侶にして又判官なるパリサイの徒は、律書を手にして、神の命じたる罰此の如しといはんとして居る。世の道德論者よ、汝をして此の時キリストの位置に立たしめば、汝は如何なる處置に出でんとするか。姦通は悪事なり、罰せざるべからず、而して法律は儼として存せり。自ら善人を以て任じ人の惡を咎むるに吝ならざる今の道德學者ならば、其の處置は自明であると考えらるであらう。然るに、キリストは衆人繞視の間に

立つて、一方には石を手にせるはやり雄を一睨し、他方には姦通せる婦人を掩護して、明白に言ひ放つた、汝等の中罪なき者先づ彼を打つべし。世の倫理學者は、キリストの此の宣言を如何に見るか。

姦通はたとひ法律の禁ずる所でなくても悪事である、人の愛を盗むものであるから。併し法律に従つてこれを罰したならば、其の盗まれた愛が戻るか。又愛を盗む悪人の精神が、汝は悪なりとの宣告や、法律の罰に依つて、一轉して善となるか。且又他方に於て此の悪を憎み、此の婦人を罰しようといきまいて居るユダヤ人は、果して自ら善人となつて他の悪を判くだけ心の清浄なる、全く罪の穢れなき善人であるか。一層高い目から見れば、悪人が悪人を罰するのは、實に自ら知らざるものである。個人の都合だとか、社會の利益だとかを目安にして、善惡を判断するは、姦通せる婦人を罰せんとするユダ

ヤ人に異なることはない。若し此の場合に、汝等のうち罪なきもの先づ彼を打つべしといふ大喝に僻易せず、身體のみならず、心の底にも曾て人の愛を盗みしことなく、衷心少しも疚しき所なく、此の婦人を打ち得る人があつたなれば、其人は即ち心の眞底から愛の光に充ち、それがために深く愛を盗むの惡を憎む人でなければならぬ。此の如き人は果して先づ此の婦人を打つてあらうか。只此の婦人の惡を憎むことのみを知つて、其の周圍に集つて石を手にして居る人々の偽善をも憎むことをしないであらうか。答は自ら明かである。此の場合に、先づ彼を打つべき資格のある人はキリストのみであつた。

讀者は、キリストの此の判断を以て單に善惡を混合するものといふか。キリストの精神は、父の愛に依て萬人の精神と肝膽相通じて、

世には一人として罪人ならざるものなきを知つて居つた。此の凡の人の罪を救ふのは、一事の善を賞し、一人の悪を罰することに依つて出来得べしと、誰か考へ得よう。心根の眞底から父の愛を昧し、其の愛に依て萬人の精神と融合するやうに根本的の懺悔變革をするにあらずんば、善悪の名目は畢竟假儀空名に過ぎない。心の底からの愛に依つて萬人と神祕の交通をするやうになつた人に取つては、其の道徳は凡ての善悪を超越して居る。利益や都合に依つて善を善とし、悪を悪とするが如きは、盲者に導かれたる盲者たるに過ぎない。世の道徳家よ、心を安んぜよ、自分の精神が既に迷や慾に迷はされず、自分の我を没して宇宙の大我と合一したる神祕的精神は、眼中汝等の所謂善悪なるものを置かず。遠く世の道徳を超越したとて、汝等が心配する如く、悪を行ふものではない。「吾等の父の全きが

如く全からんとする神祕的精神が如何にして汝等の兄弟を苦しめ得るか。

御都合主義の道徳は奴隸根性の發表である。眞の協同は精神融合の愛に依らなければ到達できない、而して此愛の爲には人々が自ら自らの精神の奥底を叩いて見る事を要する。

是に於て問題は一步を進めて、然らば此の神祕的狀態に入つて、愛の道徳に進んだ精神は、只人を愛するを知て憎むべきものゝ存在を認めないか。然り、神祕の狀態に入つて、凡ての物と精神の交通を爲し得る以上は、萬物皆我に備はると共に、我が亦凡て萬物の中に同一昧として存在する。それ故に、神祕的精神の道徳は愛の一言で盡きて居る。併しながら、吾等は此の愛の中に大なる怒と憎との存在することを忘れてはならぬ。「可愛ければこそ憎む親心は、即ち愛に

因て生ずる怒と憎との最も手近い發表である。キリストが、平和を齎さん爲に吾れ生れたるにあらざ、子をして父に離れしめ、妻をして夫に別れしめん爲に、吾は此の福音を持來せりといつた、其の秋霜の如き嚴烈なる精神は、即ち大なる愛より生ずる大なる憎である。善惡といふことも、既に眼中に置かない。吾等の道德では、愛憎といふことも、亦區々たる自利利他などいふ利益のための消えては現はるる愛憎ではない。

ニイチエの善惡超絶だの、維摩の對治法門だの、乃至はキリストの此の世に持來した利劍、若くは日蓮の本化上行の自覺に基いた折伏だのむつかしい名目を並べるに及ばぬ。讀者の多くは、紅葉山人の金色夜叉を讀み、又は演劇で見たであらう。主人公なる間貫一が、人情も義理も棄て、人面獸心の高利貸しとなつたとき、其の親友の荒尾

が、彼を改心せしむるために、如何に彼に説いたかを知つて居るか。親友をすかしたり論したり、又其の戀人である宮の改悟をほのめかしたりしても、石の如き貫一の心の動かぬを見て、荒尾は遂に彼を畜生と罵り、畜生といはれても尙怒らぬか、早く怒れと迫つた。讀者は、此の怒を逼る憎みの詞の中に、如何に多くの親友の情が籠つて居るかを見て、何と思ふか。吾等が善惡を超絶し、一切の精神と融合した愛の精神の憎みといふのは、即ちこゝである。親友に對する愛は即ち發して怒となるの消息を曉つたならば、即ち一切衆生に對する愛の、如何に又怒となり憎となるかを悟るであらう。

吾等は歴史に於て、ユダヤ人の神が怒の神であるのを見て、酷薄であるとか考へ、眞言の大日如來が大忿怒明王とし現はるゝのを荒誕であるとか考へたこともある。ユダヤ人や眞言の人々が如何なる考を

有つて居るかは、今問ふ必要がない。一切の萬物を造り出した神が怒の神であり、一切衆生を其の慈悲の光の内に包む如來が大忿怒の相を現はすといふことが、吾等に如何なる教訓を與ふるかを味へば足りる。一切を愛する精神から凡て世の紛々たる衆生を觀察して見よ、彼等は小利害小愛憎のために、或は鬪争し、或は比周し、我の内にも、人の内にも、只小なる區別のあるのを知て、融通の愛あるを知らない。彼等が善と稱して賞め、惡と稱して貶し、或は可愛い、或は憎いといふも、凡て此の小我の差別妄見から割り出した迷ひの中の小善、小惡、小愛、小憎に過ぎない。此の有様を見たならば、眞に彼等を愛し、彼等の精神をして大なる協同感應の内に遊ばしめようとする愛は、如何にしても彼等に痛捧を加へようとする怒とならざるを得ない。小差別の内に安んじて居る人間の間でこそ、善といひ惡といはるゝ

區別はつくつてあらうが、大なる達觀の眼から見れば、此の如き善は喜ぶに足らず、此の如き惡も憎むには足りない。凡ての物は愛すべきが故に憎むべきものとなる。キリストは、人の世の善惡を非認して、絶對的に「判く勿れ」と命じた。小善惡の内にさまよつて居る小善のものが、他の小惡を見て彼を惡なりと判くが如きは、實に片腹いたきことである。且つ又善惡を超絶して一切を自分の慈光の内に攝して了つた精神から見れば、凡ての人は皆罪人である、迷の衆生である、其の内の一人を善とし、其の内の一人を惡と判くが如きは、到底あり得ない事である。凡ての人を愛するから凡ての人を憎む、其の裁判は人間の根本的罪惡、根本的無明を斷ぜんとする大なる裁判である。此の大裁判は決して「判く勿れ」の精神と背叛するものではない、否同一源泉から出た眞の愛の兩面である。

凡そ闘といひ衝突といふは、一の精神が他の精神に抵抗するから生ずる。絶對の慈悲の眼から見れば、凡て融通神祕の波瀾たるに過ぎない。然るに其の波瀾の一つ々々が小我を張つて、根本の融通を感得しない。そこで根本の慈悲が其の上に加はつても、これに抵抗し、洋々の水の内に波の小我を没することを肯じない。是に於て波瀾が生じ、衝突、争闘が生ずる。即ち愛から生ずる憎といふのは、此の争闘の發表に過ぎないのである。絶對の愛が相對の小我に及ぶとき即ち憎みとなるのである。

議論が餘り空漠に馳せたようであるが、再び卑近の例を示さう。身體の内に一つの腫物が生ずる、それが全體に痛みを感ぜしむるのは何のためであるか。全體の調和が保たれたなれば、即ち腫物が身體の一部に小我を張つて、其の部分の血液の循環を早め、其の部分の

泌を増進するといふことがなかつたなれば、此の如き痛はなく、身體全體は互に相扶けて、いはゞ融合の愛が全體に行はれる。然るに一部分の小我のために此の調和が破れ、身體の生理的機能は、其の部分の變態を除くために、其部分に多くの血液を送り、早く化膿せしめて、其の小我を潰爛せしめんとする。然し又他方から見ると、若し身體全體の調和融通がなかつたなれば、腫物の疼は生じない。愛がなかつたなれば、憎み怒りは生じない。憎といひ怒といふは、畢竟小我を大なる愛の中に化膿せしめて、疼を生ぜしむるのと異なることはない。然らば人々が各其小我を主張する此現象世界に於て、如何にして此怒り憎みの疼みが生ぜずに居られるか。

今までは論點の便宜のために、絶對の愛から見た憎みを述べた。絶對なる神の愛が即ち凡ての物と衝突を生ずる憎の原因であるな

らば、其の神の懐に入り、其の精神、其の愛に幾分でも同化し得た精神があるならば、それはかく同化し得た限りに於て、神の愛を感得し、愛を感得し得たゞけ、それだけ又憎を發表せざるを得ない。神を眞の父とし、其父の下に兄弟の愛を實行するものは、浮世の假りの父、假の兄弟に背かざるを得ない。否、假の父、偽りの兄弟が、眞の父に對して背くから、其の限りに於ては之を憎まざるを得ない。父や兄弟を憎むといつたなれば、世の倫理學者は又も不孝獎勵論など、いつて驚くであらう。然り、身軀髮膚を傷けざるを以て孝の始とし、名を後世に揚ぐる位を孝の終と心得て居る論者の目から見れば、これは大不孝に相違ない。併しながら、吾等は此の如き一時の小孝のために、永遠の大孝を棄つるを忍ぶことはできない。大なる愛を體得して、其の愛に依て眞の父子の關係を永遠に結ばふとする吾等から見れ

ば、此の如き小孝は即ち大不孝である。大なる愛を抱いて、而して假の父、偽の兄弟がこれを容れない、此の愛に抵抗する場合には、吾等は腫物を開切する痛を忍んで、大なる憎を發表しなければならぬ。此の憎は即ち大なる愛である。今父と兄弟とについていつたが、子に對し、夫婦朋友乃至一切人類に對して、亦同様である。大なる愛が小なる我執愛憎と衝突する間は、其の愛は大なる憎として發表せざるを得ない。いづれの人も根本的に其の罪惡と其の迷とに制せらるる以上は、これを破るために、愛は憎として彼等に現はれざるを得ない。憎と見ゆるのは、畢竟吾等衆生の無明罪惡の根本的迷妄の致さしむる所である。眞マコトの深い憎は即ち眞の大なる愛であるのである。無明の生存、罪惡の衆生、いづれの人も其の數に漏れるものはない。然らば吾等の範圍に於ては、全く神の愛と合一して、凡ての人を愛し

即ち憎み得るものは一人もない。「判く勿れ」といふことは、即ち吾等人類の愛憎に絶対の威權のないことを示した大格言である。「子を
して其の親に背かしめ、妻をして其の夫に背かしむる」といふ其の親、
其の夫といふのは、必ずしも其の詞の通り、自分とは別なる親や夫の
みではない、いづれの人も、皆自分自身の内に、此の如き親、此の如き夫
を有する事を刹那も忘れてはならぬ。自分の心の内で、愛の光に接
し得るものは、即ち眞の我である。自分の心の内で、世間の權力に己
れを屈せしめ、世間の利害に己れを溺れしむる偽りの親、偽りの夫は
いづれの人にも存在する。これを忘れてはならぬ。親といひ、夫と
いふのが不倫であるといふならば、吾等は名目に拘泥しない、これを
鬼といふも、魔といふも、サタンといふも可なり。己れの心の内に大
なる愛を幾分でも感得し得たなれば、其の愛に抵抗する或者が己れ

の内に發動するからして、吾等はそれと戦はなければならぬ、これに
對して愛の憎を發表せざるを得ない。此の憎こそ即ち眞の道德的
習練である。世間の褒貶に恐れ、若くは又他人の善惡を裁判し、此の
如くにして自ら道德家を以て任ずるが如きは、殆んど滑稽の道德と
いふべきものである。吾等の所謂る道德は、愛が即ち憎、憎が即ち愛
である神祕である。

五、道德と宗教

「自分並に自分と交通し得る精神の根底が皆一ツの大なる精神であることを体得し、大なる同情を以て此の大精神の内に生活し行動するのが、即ち吾等の道徳である。自分の利害や社會の都合などは、或る場合には、此の道徳を一般に人々の間に行はしむる助けとならないではないが、此の如き利害打算の道徳主義は、到底如何なる事情の下にも又如何なる人をも動かさず得る道徳の根底とはなり得ない。即ち此の如き假道徳の行はれる世界は、此の世であるから、其差別現象の世界に於て、或は家族、或は國家などの團體の力によつて人々の道徳を進める機會を造り得るが、人々が此の外面の刺戟によつて道徳に進み得る、其の内面的根底は、人の精神が他の精神と交通感應し

道徳と宗教

神の御心、佛の御心、化醇の
大法はこゝにあるなり、隨
善の定數こゝにあるなり、隨
大慈の光明は柔かに山村
水郷を包めるなり、大悲の
音樂は斷ゆる間も無く古
往今來に亘れるなり、我は
此の溫暖き意義の中より
生れたる子なり、神の子な
り、佛の子なり、正眞の子な
り、我と神佛とは血の相通
へるなり、

幸田露伴—天うつ浪

....der Sohn ist das Herz in dem Vater, das aus allen Kräften des Vaters immer geboren wird, und des Vaters Kräfte wieder erleuchtet.
....Er ist ewig in dem Vater, und der Vater gebäret ihn von Ewigkeit zu Ewigkeit immerdar, und ist der Vater und der Sohn Ein Gott, gleiches Wesen in Kraft und Allmacht.

Jakob Böhme—Aurora,
oder Morgenröthe im Aufgang.
(p. 37).

得る、其の形而上的實在の力である。

一、人間の精神は、常に現象的と實体的と、即ち差別と平等と、モ一
ついで替れば小我と大我との二面を具へて居る。肉體の生存を維
持し其の幸福を増進するために、人は自然に種々の肉慾を具へて居
る。肉慾の満足は、皆獨占的の性質を有つて、他を排するにあらずん
ば自分を満足せしむる能はざる状態に居る。此の除外例は、恐らく
は只生殖慾のみであるが、生殖慾は自分一己の生存のために存在す
るものでなくして、種族の保存のために存在するから、他の肉慾の如
く全く排他的ではない。併しこれとても、多くの人に取つては、全く
箇人的の快樂として意識せられ、さなくとも種族を單位として見れ
ば、或は人種間の競争、或は動物に對する人類の暴虐などに、其の結果
を發表する。人類は、一面に此の如き排他自利の天性を有つて居る

が、他方には又協同利他の天性を有つて、諸種の愛情同情として之を
現はし、又それが膨脹擴大しては、此の現象世界に満足せず、何か現象
以上の實在界を求めようとする。此の天性は、即ち目に見える差別
現象の内に、目に見えない永遠の實在を求めようとする神祕的傾向
であつて、これが如何に美術や道德に發表するかといふことは既に
述べた所である。

兎に角、人は此の如き二面を有して居る。此の關係は、近來英米二
國で殊に盛になつて居る精神研究 (Psychical Research) の結果にも現
はれてきて居る。此の研究の詳細は、別の機會に述べようが、要する
に人の精神生活は、通常の意識に現はれたよりも廣い廣袤を有して
居るといふことを明かにしたので、通常の場合には意識に現はれて
來ない精神生活が、全く獨立とはいへないが、通常意識とは多少獨立

の働きを營み、此のいはゞ第二の精神生活が大に通常意識の根底を爲して居るといふことを知るに至つた。例へば詩想湧くが如しと、今まで吾等は譬喩の詞として用ひて居つたのが、此の研究の結果に依れば、譬喩でない、事實となつて、詩人其他天才の造り出すものは、多くは此の第二の精神の範圍で出来上つて、其の結果が恰かも地中の水の地上に湧き出づるが如くに、通常意識に現はれ來るのである。此の研究の結果を應用して、サグゼッション(Suggestion) 催眠(Hypnotism) 隔感(Telepathy & Telesthesia) 自動感覺及運動(Sensory & motor Automatism) などの、今までは不思議の現象として居つたものも、説明が出来、又これを醫療の上に應用して驚くべき結果をも得るようになった。

此の研究のことは別問題として、吾等の精神生活が、現と秘意識の上でどの二面を有して居ることは到底争ふべからざる事實である。

此の二面は詩人の所謂現實と理想との衝突、道徳では私慾と良心との争ひ、或は又佛教では煩惱と菩提と、キリスト教では罪と神命との矛盾として説かれた。人の精神をして現實世界の生存に執着せしめ、それがために小なる我慾の罪惡と煩惱とに陥らしむるものは、即ち人性の現世的方面である。其の反對に、身は此の世に住みながら、心は現實以上の世界に逍遙し、其の境に於て大なる我の満足を得せしむるものは、即ち通常意識の根底を爲し、又人の精神をして同情交感せしむる根本の宇宙精神の一面の發表である。

吾等の道徳は精神の神祕的交通なしには成立し得ない。即ち凡ての別々に現はれて居る精神が、共通の源泉から出て居るから、此交通が出来、而して此交通が吾等の精神を支配し得る。肉體生存の此の世に現はれて、各「我が我が」と主張する我は、通常意識には各獨立

の我れ即ち小我と見えるが、先きから屢言つた如く、此の多數の小我が其の實一つ根底の大我から出て居ることは、凡ての精神交通の事實に現はれて居る。人々が單に表面私慾に支配せらるゝ其羈絆を離れ、其れが「我れ」の全部であるといふ考へを棄て、深く自分の心の奥を探り、其の奥から湧いて出る同情によつて、他の人の精神と交通することを勉め、愛情の光に依つて我と彼とを合せ見るならば、吾等の精神が、何か一つの根本から出て居るといふことを感ずるであらう。固より人々の性質境遇に従つて、其の人の精神が交通し得る範圍、即ち其の人の小我が自らを其の内に發見し得る大我の廣袤は、異なるであらう。此の範圍の異なるに従つて、道德や宗教に異種の趣きを呈するが、兎に角、此の大我なるものは、吾等の精神生活の實體であつて、道德に良心といひ、宗教に神といふも、皆此の大我の見方、否、吾

の小我が如何に此の大我と關係交渉して生活するか、の態度から生じた結果である。

此の見方によれば、道德と宗教とは別のものでない、道德なき宗教、宗教なき道德は決して成立し得ない。カントが、良心の聲ともいふべき無上命令を以て神の聲と爲し、道德に依て神の存在を證明しようとしたのは、即ち此の點である。支那の道德が、俯仰天地に愧ぢざるを以て人の正道と見たのは、カントの宗教と同一轍である。マヌの法典に、「汝が只己のみありと思ふときにも、汝の心の内に最上の神ありて、無言の内にしかも注意を怠らずに、汝の行ふ凡ての善惡を監視せり。汝の心の内に住せる此の裁判官は、公明正大にして少しも容赦する所なし。」といつて居るのは、ポーロが、吾等の良心には、神の法律が銘せられて居る。此の良心を其のまゝに發表するは、即ち神

の法律に従ふ所以で、神の裁判なるものは、即ち此の隠れたる良心の判きである。といったのと全く同一の精神から出て居る。

かく論ずれば、此の宗教は所謂倫理的宗教と混同する憂がある。勿論先きに述べた如く、愛の神祕の道德は、大我なる大精神の根底によつて成立つものであるから、同時に宗教である。其れ故、之を稱して倫理的宗教と名づけても、又宗教的倫理と名づけても差支ないわけである。然るに倫理的宗教を以て唯一真正の宗教であると主張する人々は、多くは現世的道德を以て道德の至極と考へ、此の道德に合はない宗教は世道人心を害するといふことを氣に掛けて居る。それ故に、其の宗教なるものは人心の神祕的傾向を、即ち宗教の超世的天職を現世的道德に降伏せしめたものである。今改めて此の如き倫理的宗教を批評することを棄て、直ちに吾等の道德即宗教の

意味を明かにしよう。

先きに言つた如く、人の精神には小我と大我との二様の發表作用を有つて居る。小我が己れを大我の内に没して、精神の同情交通に依て、他の精神と共に大我の内に優遊することができようにするのが、即ち宗教である。それ故に宗教で大我を現實に體得發表するのは、私の精神に外ならぬ、併し此の場合の我は既に小我を没した、若しくは少くとも其の小主張を支配し抑制し得た精神状態に外ならぬ。それ故に宗教は、是非とも菩提の爲めに煩惱を制御し、理想に依て現實を解釋するものでなければならぬ。此の小我大我の區別を言ひ替へて、現象と實在との對比とすれば、宗教は實在を本位として現象を觀じ、又之を支配しなければならぬ。先きに美術の場合にも言つた如く、表象は客である、方便である、理想は主であり目的である。

又道徳で論じた如く、父子、夫婦等の愛情は、猶ほ一層大なる永遠なる愛情の一つの發表として、其の大なる愛情に根據を据えるにあらずんば、其の小なる愛は、基本なき偏頗なる愛情となつて、却て相愛して居る双方の精神を低くするものである。然らば精神交通の愛情を最大の根底から築き上げようとする道徳即宗教の理想は、決して現世の利害や現象の束縛に制せらるべきものでない。善悪罪福を超越し、世の是非正邪を不二の一門に收めて、其の最高なる理想の光に依て現世を照し、其の光明を基本として人生を嚮導すべき任務を有つて居る。此の最高の覺悟なしには、道徳も永遠の根底を失つて了ふ、宗教も其の本分を失ふ。それ故に倫理的宗教を以て宗教の本分を否定するならば、それは同時に道徳と宗教との永遠の根底を奪ふものである。

宗教の心髓は、一言にして盡くせば大我即ち一切精神の根底を吾等の精神に體得することである。併しながら、如何に此の大我を體得するか、の工合に至つては、人々の精神状態に従つて異ならざるを得ない。或るものは小我と大我との對比を峻酷に見て、従つて絶對的に罪惡の若くは又迷の小我を迫害し、而して一方に於ては極めて威嚴ある神を仰ぎ、其の神を怒りの神、嚴罰の主と見做す宗教もある。又或るものは、現象世界の我は我の實體でないといふことを認むるに至つては他に譲らないが、而も愛に依つて其の大精神を感得し、愛に依て若くは又頓悟に依て實在と融合し得るものは、即ち吾等の此の生を享けたる心であるといふことを見るから、何處までも自分の心を基にして、大我に接しようとする。ポーロが「肉體も亦靈の宮である」といつたのは、即ち此の點である。古今東西の宗教は其の種類

甚だ多いが、極肝要なる差別に依て分類すれば、大體此の二つの特徴に歸する。一つは畏れの宗教、一つは愛の宗教である。牝牛が、人を脱して神となる、己れの小ささを悟る所以である。人のまゝにして神となる、己れの大きいなるを信ずる所以である。といったのは、簡單に此の二大別を言ひ現はして居る。

固より此の二つの特徴は、必ずしも常に相分れてのみは居ない。例へば、古印度の哲學や原始佛教では、現象世界を絶對の迷と觀ずる、而も吾等の精神は其の内に直ちに實在の大我を實現し、我即神となり得るといふ教を説いて、其の方法を禪定、瑜伽に求めた。之に反してユダヤ教では、吾等の肉體も精神も、共に元は神の形に似せて造られた、即ち神的存在であるといふことは知りながら、吾等は既に其の元の状態から墮落して罪惡に染つて居ることを強く感じ、神に對する正

義に依つて罪の償ひをなさんと勉めた。それから出たキリスト教に至つては、吾等は罪人であるといふことを第一の根本としながら、而もそれと同時に神を父として、自ら其の子と感ずる愛情に依て、神と父子合體ができることと教へた。此等の教は各其の當時の需要や因縁に依て種々複雑はして居るが、要するに先きにいつた人間の生命、人間の精神に相反對する二面の存在することを深く意識して、二者の背反を融和しようとしたもので、宗教の天職は此の融和に存する。宗教が如何に此の融和を試みたかといふことの研究は、續いて論ずるが、それに先だちて、尙少し諸種の宗教が如何に此の二面の對比を觀じて居るかを明かにしよう。佛教はインド古代宗教の一般の特徴と同じく、個人精神が迷ひの状態に止つて小我に執著する原因を、知の方面から見て、無明が即ち一切の迷ひの原因であるとする。

それ故に、一旦我は畢竟無實性の迷てあるといふ悟りを得れば、其處に即ち凡ての我執を離れ迷妄を去つた大我眞如が現ずる。佛教は哲學思想勃興の時勢に生れたから、此の如く大我の眞相を小我から隠くす障壁を無明といつて、知の方面から見たが、其の實無明なるものは我に執着するの無明である。其の無明を打破するのは、悟り即ち智慧ではあるが、其智慧なるものは通常の意味での知即ち知覺や判斷の知ではなくして、根本から我執を打破する知である。而して其の我なるもの、本性は貪瞋痴の働きに止まるものであるから、今の吾等の言ひ方にすれば、即ち主我の慾である。之を打破するものは、又それだけの力でなければならぬとして見れば、無明を破る知なるものは、即ち一つの力でなければならぬ。此力が何者であるかは後に論じようが、かく見てくると、佛教が小我大我の背反を見る見方は全くキリスト教と同じといはなければならぬ。

キリストは吾等が至誠神を父として愛し、其の子として父の全きが如く全かるべしと教へた、其の子である吾等が、何故に亦いづれの時、神なる父に背いたか、キリストは之を問はず。兎に角、吾等が神の子であるといふ意識を失つて、神の恵の内に住みながら之に頼り之に己れを任せることをしない、其の小我執着は即ち吾等の罪であることを教へて、此罪から逃れるには、全く人慾を棄て、アバ父といふ無垢なる無邪氣なる愛の信仰に返らなければならぬことを自分自身の實例で示した。キリストの福音は、全く意志の方面、吾等の根本的性格の方面から手を着けて、其の變轉によつて新しき生命を與へんとしたものである。ポーロが智慧の教を排斥して、信仰の道を説いたのはこれが爲である。併しながらキリストの福音が悟り

智慧の方面を缺いて居るといふのは大なる誤である。キリストは、吾等の心が小兒の如くならざるべからざるを教へて、心の貧しさものは即ち天國に入り得ると教へたが、此の如く我が心を空虚にし、小兒の如くにたるのは、即ち大なる神の智慧の光が吾等の心を照し、小我執の迷雾を追拂ふためである。神は力と光榮との神である、而して吾等に神の子の福音を傳ふるキリストは、自ら宣言して、吾は光なり、眞理なり、道なりといつた。即ち吾等が人慾の執着罪惡を棄て、愛と信とに依て天父に合一し得る、其道を照すものは、矢張智慧である。神の知は愛の力と離れず、信は光を與へ、愛は即ち智慧を活かして來る力である。

此の如く見れば、佛教とキリスト教とは、人性の内に同じ二つの方面を認め、同じ理想によりて、此二つの背反を融合しようとしたのである。

ある。

其の融合の方法に至つては、佛教では、佛陀は即ち無明を拂ひ盡し、死魔の縛を脱して大我に合一した人格であることを承認し、信仰し、此依信歸依によりて吾等も亦同じく佛陀となるべきである。佛陀の人格は即ち吾等も亦同じ境涯に至り得るとの保證を與へ、これと同時に又これが導きを與へる人天師である、世尊である。此佛陀の人格は、一方からいへば、普通の人物である。肉體を有し、我慾無明の生活をして居つた人が、内外の誘因によつて發心得道して、佛陀覺者となつたのである。併しながら此の如く一の人格が人間から佛となり得るといふことは、其人の根本的性格に、一切の迷ひを離れて眞理の本源、智慧の本體である本性を具有して居らなければ、あり得ない。即ち此點から云へば、佛陀の人格は久遠實成の佛である、無始無

終の大我法身である。

一人の人格が、一方では人間、一方では神の二方面を同時に具へ得るのは、固より神祕であるが、併し此二面は凡ての人の本性に具つて居る性質であつて、佛陀の人格が神祕であるならば、吾等の性格も亦神祕である。「佛も元は凡夫なり」は、人間の側から見た此の神祕である。凡夫も終には佛なりは此の同じ神祕を佛の方から見たものである。佛陀の人格は此の二面を具へた神祕的人格で、吾等が此の人格によつて成佛得道の保證を與へられ、摸範を示され、而して此の佛陀の人格を如來として絶對に信仰するなれば、其の吾等の信仰の内には、直ちに佛其ものが現はれて來るのである。佛は即ち吾等の中に存する本來原有の如來である。所謂「正信於如來、決定不傾動……於佛心清淨、成就於正見……不空而自活」である。此の最後の句「巴

リてスへば *anogham tassa jivitam*) が見れば、日本の佛教者が小乗として貶して居る原始佛教徒でも、如何に佛を如來として信仰して、此人格的依信の神祕的合一に依て大なる知見に達して居つたかを見るに足る。

佛の人格が、此の二面の神祕を具へて居ることを信じ得るなら、其の信は、亦キリストの神人二面の人格に對しても、同じく發表し得なければならぬ。ヤソに現れたるキリストが神であるとか、ないとかいふ議論によつて、キリスト教の内に異論を生ずるのは、殆ど無意義の論争である。段々明にし來つた神祕の信仰が、宗教の生命、精神の實力であるなれば、而して吾等の内にも神人二面のあることを明にし得たなれば、吾等は佛陀の人格に於て此の二面を認めたと如く、キリストの人格の内に何故に此の二面を發見し得ないか。

キリストは自ら稱して「人の子」と稱した。ユダヤ國民の豫言的希望を身に現はし、神の使として世を救ふといふ自信を有し、これが爲には喜んで死に就いたキリストが、時には「神の子」と自ら稱すると同時に、好んで「人の子」を以て自ら任じたのは、何の故であるか。「人の子」とは、彼の人の子、此人の子といふが如く、即ち人といふ意味である。先きにナポレオンが「人」といふ名を受けたことを述べたが、キリストは自ら任じて「人」と稱し、人の摸表として世に現はれた。人の本性は、ユダヤの宗教によれば、罪人である。又當時の東方の哲學思想によれば、靈に對して肉が人の本體である。是故に人は、此の肉の束縛から、又罪の呪咀から救はれなければならぬ。運命を有つて居る。既に救はれるといふならば、罪と肉との人は、又罪を離れて愛に入り、肉を脱して靈に化する本性を具有して居なければならぬ。罪と肉との人

間は現在の我である。愛と靈との人は理想の我である。此の理想が現實になり、救が事實として現はれ得るや否や、此の問題の爲に、幾千年の人心は苦悶した。或はユダヤの豫言者となり、或はギリシヤの哲學者となり、此の問題の解釋を與へようとした人は續出したが、又其の解釋は中々の熱情と非常の智慧とを以て試みられたが、未だ曾て一人の我は「人」なりといふ自信を貫いて、「人」の標本を生命で現はし、救の福音を色讀した人は一人もなかつた。然るにキリストは即ち人の子の體現によつて、人は亦神の子たり得るといふ事實を示した。ゲトサメネに於ける彼の最後の祈禱は、即ち人の子が今までの罪と肉との生命の終を告げた祈禱である。而して彼が生死を貫いて救へた「爾等我が愛に居れ、凡て父の有ち給ふ所の物は即ち我が物なり」の教は、神の子として彼が凡て彼を信ずるものに傳へた、父子一體、愛

の融合の福音である。神の子として彼が人間に傳へた最も近く、又最も大なる救ひは、即ち彼れの生死に現はれた愛の合一である。彼は誠に深く人の本性を自覺した、それ故に彼は神の子となつたのである。彼は *par excellence* に「人であつたが故に、又 *par excellence* に「神の子であつた。一躰人は多くは罪と肉との生活の内に營々として、醉生夢死の間に自らを知らない。若し人にして深く自らに就て自覺を喚起するならば、第一には罪と肉との生命に對する不満足を感じ、此不満足之感を深くするならば、己れの我は今の肉體の我のみでない、其の肉は即ち靈の宮で、其の靈の内には、凡ての精神が合一する愛の生活が現はれ得ることを自覺する。前にいつた如く、道徳なるものはつまり此の愛の發表であるが、其の萬人の精神の根底に入つて、其の愛が一つの人格的生活を有つといふことを見たなれば、

此の根底は即ち吾等の愛の源泉である。吾等精神の父である。世間の哲學者には、此の根底を形而上的主義として、而も其の人格性を容れない人が多いようであるが、此の如き形而上的主義と吾等との間には、如何にして又如何なる精神交通が成り立ち得ようか。吾等も固より此の形而上的主義が吾等と同じような感情や思想を抱いて居る人格であるとは主張しない。併しながら吾等は人の子である、人と人との間に行はれる愛、即ち人格の合一から出發して、其の根底の源泉を仰ぎ求め、其の存在を設定し、而して此と交通しようとして勉むるのである。吾等の此の最上實在に對する關係は愛である、即ち吾等の人格を捧げて之に歸入するのである。されば其の實在が、それ自らにしては如何なる風性を有つて居るかは、吾等の關せざる所である。吾等が愛を以て之に對し、彼れ亦愛を以て之に答ふる

限りは、其の關係は人格的である。

是は餘論として、兎に角キリストは人の子の自覺によつて、神の子たる實を現はした。彼は人であつたが故に、即ち其の生死によつて救はるゝ人を實現したから、之に依て亦救ふ神の力を現はした。眞に救はるゝものゝ標本は、即ち同時に救の力である。キリストは是故に眞の「人」で、同時に眞の神である。神人同性は單に宗義でなくして、活きた力である。

煩惱即菩提の神祕は、佛教に於いては隨分空論のために弄ばれた、それと同じくキリストの生死に現はれた神人同性の福音は、キリスト教徒と稱する人々の中でも排斥せらるゝ不幸に陥つて居る。人が苟くも人生の道德に就て其の根底の神祕を考へ、人性の中に現はれて居る神祕を自覺するならば、人即神の宗教に到達することは容

易であらう。

六、宗教と人生

「人即神」の福音が明に一人の人間の生命に現はれて、吾等に神を父として此に合一することの出来る保證を與へた。「人の子」は、天國を吾等の間に持ち來たし、如來は寂光の土を此土に現はした。吾等人間を罪人として叱責したキリストが、「天國は汝等の間にあり」と教へ、此土は穢土である、吾等は凡夫である事を痛嘆した佛陀が、其の如實の正覺身を現はして常に我等の心に住すといふ事、是れ皆矛盾の如く見ゆる神祕である。此の如き矛盾を人々に知らしむるばかりでなく、人々の生命に躰得せしむるのが宗教の天職である。此矛盾が自己人格の中に矛盾でなく、此神祕が其人の生命となつた人が即ち宗教の人である。

宗教と人生

Πατηρ ἡμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς,....
ὅτι σου ἐστὶν ἡ βασιλεία καὶ ἡ δύναμις καὶ ἡ
δοξα εἰς τοὺς αἰῶνας.

Matt. VI. 9—12.

自分の精神に此の神秘的合一を味得した状態を、吾等は信と名くる。即ち尤も廣い又尤も深い意味での信頼である。凡そ信といふは、自分と交通し得る他の精神の内に、己れと同情同感するものがあるを感じて、其交感孚應の内に無限の喜と安心とを感ずる状態である。商業の取引などに稱する信用といふのも、矢張此の信が局部的に發表したもので、即ち契約の對手兩方が、其の約束を守るといふ點に於て精神交通し、それに依て契約履行に關する信頼を對手に置くことが出来る状態である。此の理を擴めていへば、朋友間の友情、戀人の間の愛、此等は各其の動機を異にしても、而も互に對手の人格精神に己れと同じものゝ存在するのを感じ、此の感じの孚應に依て、或は浮世の浪にゆられざる交友となり、或は生死を共にして悔ひない戀人となる。此等の愛情は人格の融合、精神の交感に基く信である。

凡て此等世間的の愛情に於ては、己れの内に見出し得る對手の人格は人間の人格で、尙彼我の區別を存して居る。若し此等の愛情に全く彼我の別を容れないようになつたならば、其愛は絶対と稱し得るが、此の如き絶対の愛は人間の間には十分に發表することが出来ぬ。只此等の愛の尤も廣く深く、又尤も己れに直接なるものが即ち宗教の信である。何となれば、宗教の心髓は先きに云つた如く、神人の合一である。又其神は或る宗教では我以外の外物の如く、教へられて居るけれども、佛教やキリスト教に於ては、其の神は即ち吾等精神の純清なる本體である。即ち此等の宗教では、若し理想通りに吾等の神に對する信即ち愛を現實にするならば、其の愛は既に彼我の別を絶して居る、其の信は吾等の精神が本源の故郷に返るのである。併しながら是は理想の状態で、吾等が尙人間である以上は、神に對し

て尙多少對手といふ關係を保つ外ない。「人即神」煩惱即菩提の理想を完全に實現した神人或は佛陀に在ては、其の精神が即ち神と同体である。既に本源の故郷に住居して居る精神である。彼は即ち直ちに永遠のロゴスである。此の土は即ち本有の淨土である。併し此の状態に至らない吾等は、尙光に背けるロゴスである。彼方に本有の淨土を故郷として望まなければならぬ状態に居る。それ故に吾等の信は、矢張神を父として愛し、其の神の國を故郷として戀ひ慕ふ信であるより外に仕方がない。

此の信が出来るだけ遠大に、理想に近づける方法を教へ、之に従て精神を修練せしむるのが宗教の職務である。或は禪定の床の上に乗流三昧に入つて、佛智に合一せんとする人もあり、或は彌陀の名號を唱へて、之に依て攝取の光明に入らしめようとする教もあり、或は

天地山川の壯麗なる自然の顔容に、神の智慧と愛とを望み見る人もあれば、或は又教會の儀式に依て神聖にせられたるパンや酒に依て、救主の救ひに興り得るとする教もある。夫等のいづれが眞であるか、いづれが正しいか、今論ずる必要はない。又一人の意見に依て定め得るものでない。人各々其の性格の赴く所、精神の需用する所に從て、己れに適したものを取るべきである。併しながら、茲に一つ吾等有限なる精神が信に進むに最も必要なる、又恐らくは萬人共有なる條件がある。それは、佛陀なりキリストなり、若くは其の他の聖人なり、其の人の人格が神人であると信ぜらるゝものに、絶對の信を注ぐことである。

今茲には、いづれの聖人が果して吾等の信を捧ぐべき神人であるといふことを研究することを避けて置く、是も恐らくは人々の需要

に從て異なるから。兎に角、佛陀やキリストの如き神人は、其の人たる生命の内に神たる實を現はした。彼等の一生は、人としては吾等人間と同じ肉體を有し、同じ煩悶と健闘とを遂げた、それ故に吾等は此の人に同情し、此の人を尊敬することに依て、人たる吾等の生命に大なる力を與へられる。所行讃に描かれた如き佛陀の出家は、世間の五慾と闘ひ、小我の執着を斷すべき吾等の精神的修養の好模範である。福音傳に現はれて居るキリストの、受洗より死に至る間の勇奮意氣、特に其の死に先だつ數日間の決心と煩悶とは、吾等人間が肉體の罪から逃れ出て、天父の慈愛に投すべき天命と其の間に起る生活執着に對する勇奮苦悶の激烈なる標本である。佛陀が城を出る時に、最愛の妻と子との眠り姿を眺めて後髪引かるゝ其の情を斷じた一場の悲劇、キリストが全身に滴る汗を流しつゝ、此の肉體の明

日は殺さるゝことを悲しみつゝ、而も凡て父の御心の如く吾身の終りを遂げんと祈つた、其の一夜の悩みの歴史、此等は純粹に人間的に吾等の心情の奥を叩き、吾等の肺腑に徹する人間の歴史である。然るに此の「人」は其の「人」たることに依て即ち神たる實を現はして靈の復活を示した。佛陀は吾れ無上道を得たりといふ自覺によつて、今後復生死に漂流しない歸滅の教を傳へ、弟子等の心内に不動の信、不滅の法身如來を殘して肉體の生を去つた。彼れの遺弟が「如來滅すと雖も法身永へに存す」といつたのが迷でなくば、佛陀が五十年の教化は、即ち彼れの人格の神的發表であつた。キリストに在ては、彼れが人の子、即ち神の子の自覺を貫いて、生命を棄てたのみならず、彼れの靈は明に弟子等の眼前に、又彼等の心靈の内に復活して、彼れは即ち無始以來神と俱に在るロゴスなることを示した。彼れは肉に依

ればダビデの裔で、靈に依れば即ち神である。

此の二人の神人たる實を示した歴史には各々其の特徴はあるが、彼等の人格が人たることに於て、吾等の尤も同情すべき人であるのみならず、其の人と同じく、吾等も亦人であつて同時に即ち神である（若くは神となり得る、若くはならなければならぬ）ことを眼前に示した點から云へば、吾等の教主である、救主である。

吾等がまだ人間である以上は、彼我を絶した愛に依て神に合一することは至難である。それ故に此の如き愛を現實にした神人があれば、其の人格に對して至誠至信の歸敬を捧げて、其の人に同情交感し、己れを其人の人格の中に没するに依て、神に似んとを勉めなければならぬ。キリストは嘗て天を仰いで祈つた。「父よ爾は吾が内にあり、吾れ亦爾の内に住す、此の如く凡ての人も吾等の内にて一にな

らしめよ。佛陀は將に其の悟得の眞理を説いて、幽冥の内に迷へる衆生の迷を解かんとするに方つて、自ら誓つた。「我が成ずる所の妙法は一切の暗を除き、我が法門は寂靜にして世間の惡を離る。一切衆生をして此の法界に入つて、無苦無漏、佛の普淨眼を得せしめん。即ち此等の神人は、それと精神を一にする衆生が、凡て彼等自身と合一し、凡ての罪と迷とを脱し得ると確信した。彼等の説いた教理がどうであるのかうであるのかといふ批評もあるが、吾等は口舌の眞理よりも、彼等の神人たる人格に歸敬するのである。是が即ち信である。直ちに神と合一する代りに、神人に信賴して、彼れと同化せんとするのである。此の信は吾等をして此の世の生活を完くせしめ、彼岸の光明に入らしむる所以の力である。

先きにいつた道德の根底なる愛も、又美術の本體である神祕も、此

の信に依て淨められ、完くせられたる精神を有つにあらずんば、永遠の活動を爲し得ない。絶待の愛の状態に入つて、吾等が如何になるべきかは、未だ此の世界の吾等には現はれない。併しながら吾等は神人に對する人間的の同情、又神としての信仰に依て、吾等も亦彼の神人の如く、神に似んことを知る。是れが即ち人生をして天國たらしむる愛と信と望との源泉である。

信と愛と是れ二つの物ではない。精神の交感道交から出た人格の融合が愛であるならば、神人に對する愛が即ち信で、此の信に依て吾等は遂に神に似父と一になれるといふ確かな見込がつけば、即ちこれが望である。神を父とすることに依て一切の人類を同胞とし、同一佛性海の内に一切衆生を同一波瀾と見る大仁慈が愛の最大なるものであるならば、此の愛は即ち吾等が神の子たり得、又一佛性海

の内に無漏の佛果を達し得るといふ確かな望に依て養成せらるゝものでなければならぬ。而して此の望は、即ち佛なり、キリストなり、の神人を信ずる、其の信に依て保證せられ、又實現せらるる。それ故に信と愛と望とはつまり三にして一である。宗教が人生に與ふる最大の又唯一の賜は、此の三一の徳である。

人の生活、社會の組織、文明の發達、いづれも此の三一の基礎なしには圓滿の發達を遂げ得ない。人は宗教的の信なしにも生活し得る、併しながら信なければ大なる望もない、大なる愛も大なる憎も發し得ない。此の如き人は、一日々々の幸福を逐ふて奔り、一時々々の利害を打算して、利巧なる世渡りをなし得て、功利的道德の善人たり得るとも、其の小なる望は多くの場合に於て失望に終り、其の小なる愛は、變轉常操なき愛憎に迷はされ、遂に世間の波瀾の内に葬り去られ

る運命を有つて居る。

一個人の上のみならず、社會國家の運命は、今までの人間の歴史が示す如く、皆此の如き運命に葬り去られた。領内に日輪没することなき大帝國も、世界の永遠なる工場といはるゝ國も、そが依て立つ所の理想にして、單に威武を張るが爲め、又商利を攫取するがためのみならば、此の如き國は矢張り歴史の上にローマ帝國やチャールズ五世の帝國と同一の刻印を押されるべきものである。今の帝國主義の人々は、殖民と商業との利益線を擴張する事のみを以て、凡ての國家の存在の理想目的と信じて居るが、彼等は中世紀の諸侯單位の國家が、終に彼等の間の利益競争のために滅され、近くはドイツやフランスが、其過大の殖民政策の弊に苦み、内部の破綻を顧慮せざるを得ない状態に居る事實を、何と觀察するか。人は米國が其勢力範圍を太

平洋の四邊に廣げるのを見て、其の國勢の盛なるを稱するが、其の偉大なる國勢は、抑々如何なる宗教的平民主義のニューイングランド移住民の祖先に依て養はれたるを知るか。或は又スキスの小國が國際場裡に雄飛しないのを見て、彼の國民の氣力に乏しいことを推量した、驚くべき賢明なる日本の國家主義論者は、彼の小國民が如何に犯すべからざる威嚴を以て四邊に臨みつゝあるか、又それのみならず、彼國の二十一のカントンが各々其の自治獨立の太平に浴しつゝ、内には技藝學術の文明を開發しつゝあるかを看過したものである。國家は畢竟個人と同じく、それ自身存在の權利を有つて居る、併しながら其の存在の權利は理想の根據なしには到底持續し得るものでない。其の市民の各々が其の徳を完うし、能く同胞と愛の結合を爲し、而して此の結合に依て、理想ある國家の天職を遂げようとす

る自覺と勇氣とを有するにあらずんば、國家の存在は不可能である、空夢である。

十九世紀、二十世紀の文明は、科學の文明である。科學思想が一方では國家の萬能を辯護し、一方では利用厚生之道を興へて、其の結果商工競争の世となした。吾輩は敢て直に此文明を呪咀しない。只此の如き文明の子は、今や人生精神上の基礎を忘れ、國家の爲に名として個人を迫害して顧みず、商工利益の爲には修養煉達を妨害し、其極今や文明の子等自らが其文明の弊に苦しめられつつあるのを見ては、黙視する事が出来ない。然し文明の弊、科學萬能の迷夢については、前迄に論議した事もあり、今一々之を數へ立てるに及ばぬ。吾等は弊を論じて、迷の中に迷へる者を覺ますを勉むるよりも、先づ此を渦流の中から救ふ繩を興へなければならぬ。「細みじかくし

ては深泉にいたり難く、翅よはくしては大虚にかけることなし。」而して此の長い繩、此の強い翅は實に宗教の信である。一貫の理想に立ち、人心の神祕に基いた信と愛と望みとである。

宗教は神人を信ずる事に依て父なる神に歸入せしむる。神が父なれば、神人は吾等の兄である。而して此父の愛を吾等に躰得せしめ、又父の威嚴に依て吾等をして信と愛と望との路に歩ましむる者は我等の母なる教會である。父の聲を吾等に傳へ、兄なる神人の「人の子」神の子の深刻なる一生を吾等の前に現前せしめ、此に依て教會の薰陶に實効を興ふる者は即ち吾等の姉なる美術である。

此譬喩には必しも固着する要はない。が超世の威嚴ある父が直に我等の信と愛との對手となり難いのを、兄なる神人が其間に立て救の保證を興へてくれる如く、此信と愛との擁護者となり監督とな

る者が地上に存在しなければ、宗教は人生に實効を呈し得ない。之を吾等の母といふは不當ではない。而して此の如き母は萬邦萬民の上に立て、吾等の精神の嚮導者、又救ひの實行者たるべき教會でなければならぬ。今の世に、國教だとか公認教だとか云て、教會を國家の奴婢となし、天國の鍵、濟度の法輪を地上の國家、利害競争の國家に托しようとする者があるが、彼等は宗教家の天分を自ら棄てた吾が身知らずの不埒者、否、宗教の大敵である。之れはさて措き、今の世に吾等の理想の教會を建設し得るか、若くは又何れの現存教會に此理想を托すべきか、此等の論議は之を他に譲らう。兎に角、宗教の神祕を人生に實現する司管者は萬邦の上に立てる、國家民族を超えたる教會、神聖なる教會でなければならぬ。

此教會の助けをなして人生に神祕の甘露を雨らすべき者は、即ち

美術である。美術が如何に吾等の精神をして神祕の交通に入らしむるの易行道であるかは已に之を論究した。特に吾等の宗教は神人の信を本とするが故に、神人の一生に現はれた「人天師」の煩ひ、悩み、戦ひ、勇氣等の深刻なる題目は最もよく藝術によつて吾等に傳へられ、吾等を感じ動する力を持つてゐる。佛教に於ける所行讃の如き、西北印度の佛教彫刻の如き、キリスト教に於ける十四世紀の信仰畫の如き、ブラームスやバッハの音樂の如き、皆是れ神人の精靈を吾等に與ふる藝術で、此等の藝術を除いたなら、佛陀やキリストの人格が吾等に與ふる感化は到底其半を減ぜざるを得なかつたであらう。假令又直接に神人の精神を表はし、教會の教化を助くるのでなくとも、藝術は人をして身は塵寰に居りながら、靈界の呼吸に接せしむる超世的魔力を有する利器であるから、其れによりて人心を刷新し清洗

する力の偉大なる事は云ふまでもない。ノワリスが歌つた

吾等の生命は安立を得て永久の生に進み行く、内面の熱によりて擴められて吾等の心は清まる。星の光は流れて生命の金色なる酒となる、吾等は之を嘗めて輝く星となる、

愛は蒔かれたり、離るる事はない、生命は無限の海の如くに到る所に浪だつ、妙樂の夜のみ、永久の詩のみ、吾等の生命である。

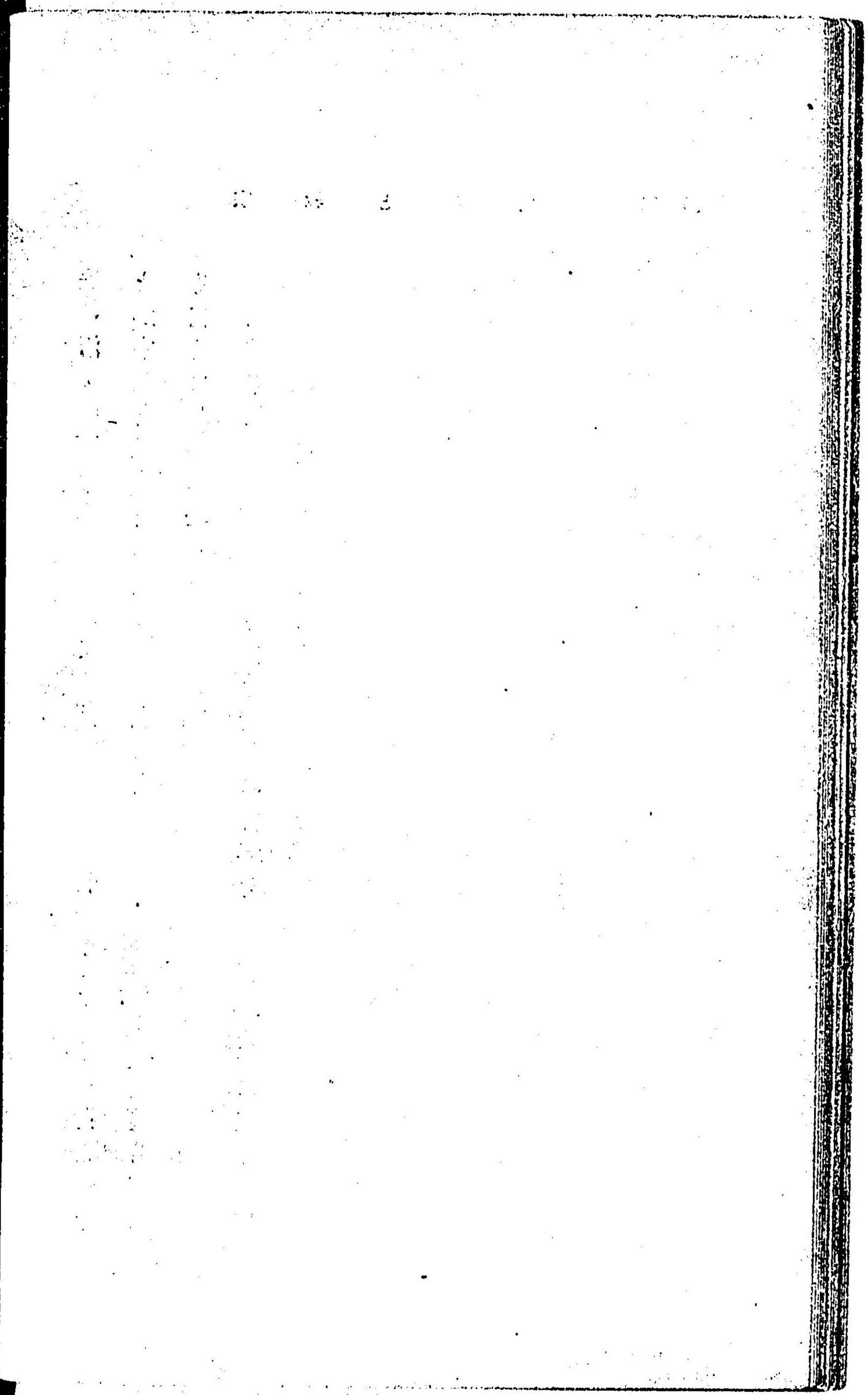
吾等總てが仰ぎ見る太陽は、即ち神の顔容である。

詩、音樂、造形美術は即ち此の如き生命の酒である。此酒は吾等に愛を與へる、光を與へ、又破られぬ夜の樂みの中に吾等を融合する。

吾等の宗教は此の如き父と兄とに力を得、此力に依て世と戦ひ得る。吾等の宗教は此の如き母と姉との慈みに浴してある、此慈光に依て世を攝せなければならぬ。根本の信にして確立したならば、根

底の活動機關を作り得たならば、餘事は破竹の勢である。慈善事業とか、宗教と教育との關係とか、教會と國家との關係とか、問題も困難も自らにして解決する。

歸する所は吾等は自ら吾等精神の神祕を洞觀して、其に依て大なる精神の根底に入るにある。



外篇第一 文學

Moreover, something is or seems,
That touches me with mystic gleams,
Like glimpses of forgotten dreams—

Of something felt, like something here;
Of something done, I know not where;
Such as no language may declare.

Tennyson, The Two Voices.

Sing, unsterbliche Seele, der sündigen Menschen Erlösung,
Die der Messias auf Erden in seiner Menschheit vollendet,
Und durch die er Adams Geschlechte die Liebe der Gottheit,
Mit dem Blute heiligen Bundes von Neuem geschenkt hat.

Klopstock, Messias.

ゲーテ「ファウスト」に於ける
マーガレットの運命

人生悲慘の事多し。而して其真相を尋ねれば、何れか理想と現實の衝突にあらざる。人間社會の大洋由來狂風多く怒濤波ち易し、而して此風波多くは肉體と心靈との争闘に因す。渺たる浮世の海面に浮び、今將に親船と特立せんとして、而も未だ帆掉の術に達せざる青年男女が屢此危地に陥りて再び救ふ能はざるに至るは、豈人間悲痛の事に非ずや。彼等は娑婆世界新來の客なり、人心微妙の活動を知らず、又義理人情の羈絆が如何に人間を繫縛苦惱するかを知らず。况や又害惡毒蛇よりも猛なる者が、常に此世界に毒焰を吐けるかに於てをや。彼等は浮世を見る事、花に戯むる、胡蝶の春光に於けるが如し。漣波激漚たる春の海を見て、未だ層濤天に怒りて黒龍水に迫る荒海を知らず。彼等の心に映ずる現實は、簡朴單調にして和暢明快なり、現實の事物は

彼等に對て一も彼等の意に逆ふ事なし。此等憂を知らざる現實に對する理想は從て單純なり、否彼等は殆ど理想界に遊べる者なり、桃源溪中に陶然として酔へる者なり。假令時には彼等の現實が彼等に不満を與ふる事あるも、此不満や煩悶や投じたる石の爲に水面に生ずる波紋の如し、須臾にして消失せんのみ。彼等の理想は殆ど現實と一なり。假令一ならずとするも、其相距るや實に數歩の距離のみ。彼等は常に燃ゆるが如きの冀望を抱けり、然れども此に達するに當りて路に横はる困難を知らず。彼等は現實の中において而も既に理想の中に遊び、理想に達したるが如くに惟思す。單純なる經驗知識と、此淺薄の經驗より算出したる、彼等には一舉手一投足の勞を以て達し得べきが如く見ゆる無邪氣の理想界は、彼等をして夢界逍遙の人間たらしむ。ケルネル曾て歌て

Der Frühling bricht an, das Leben keimt

Manch schöne Träume hab' ich träumt.

(春は明けぬ、生命は芽出しぬ、
幾多の美しき夢を我は見き)

といひし者實に是れなり。春の野に胡蝶の夢を結びて花間に徘徊する青年は、溽熱の夏來ん事も思はねば、風雪膚を襲く寒さありとも知らず。鏡の如き海の面に船舷たゞきて歌へる可憐の舟子は、海原に風と濤はある者とも思はず。撞着なく、煩悶なく、紛擾なく、憂慮なく、從て又考慮熟察する事なく、熙樂順境の浮世を見て其裏面を知らず、放佚なる寵兒の如く、好むが儘に、思ふが儘に、意の赴く所に從ひ、欲の走る所に應じて、事を行ひ世に處せんとす。是に於て彼等は最も恐るべき最危険なる域境に臨めるなり、而して自ら知らず。彼等可憐なる單調の心情は、屢肉躰の爲に制せられ、忽にして一時一瞬の發動の爲に精神心霊の界をして、肉慾の横行蹂躪する處とならしめ、青年皎々たる純潔は茲に顛覆せらる。事此に至れば、彼等は最早現實理想混淆の夢界に逍遙して、熙々たる春光を弄する能はず。今迄我手の中にありと見し美しき

花卉は高く天上の霞に隔てられて、執らんとするも能はず。此時迄は我身を圍繞すと思ひし激漚たる春浪は跡もなく、濤は岳の如く舟は木の葉を漂はし、空馳す雲、吹きすさぶ風、何れ我身を危くせんとせざるはなく、帆を揚げ櫓を操らんとて勉むる事益多ければ、失敗苦惱は愈長じ、終には自己を殺すに至る。今の現實は到底昔の理想を容るゝ能はず、世間の枷鎖は堅く我を縛し、真心の重荷は我を壓し、一旦肉體の爲に受けたる心靈の創痕は終に癒すべからざるのみならず、此枷鎖、此重荷を脱せんとする爲に、我は全く滅ぼさるゝに至る。憐むべく悲むべきの至に非ずや。而して其因を尋ねれば、實に心靈と肉體との衝突の爲に、理想と現實との背反を生じたる者に外ならず。

我曾て清見が關のふりにし跡にゲーテが『ファウスト』を繙きしとき、詩聖が書きし少女マーガレットの運命は深く我心に銘して、磯にくだくる波の音高く、矢の如く馳する黒雲の切るゝ度に月の光り物凄く荒海の面を照せし其時の様は今も尚、『ファウスト』の巻を手にする度に眼の

前に浮び出づ。彼の獄屋の場に至る時には、其夜獨り孤燈明滅の裏に清見寺の鐘の聲を耳にして、或は獨り自らハインリヒが身となりて、松風の音に紛れ、獄屋に忍び入る心をなし、或はマーガレットが心緒を想ひては、岩に碎けて滔々たる波の音を良心の責罰とも聞きし事、露忘るゝ能はざるなり。

試に思へ、オステルの祭過ぎ、堅く氷に鎖されし小川の邊には紅紫の艶を闘はし、雪に白かりし野原は新緑燃えん計りにて、日朗に百鳥微妙の天樂を奏する春の日に、己が萬斛の愛情を注ぐ戀人に携へられて、花園を逍遙せし、マーガレットが心には純潔なる愛情の外一點の微動細塵もなかりしを。又想へ、此春の長閑けき空を己が愛しむハインリヒと我とに占有して、軟輓纖弱の白き手に、草花の花弁を揉りながら、

Liebt mich—nicht—Liebt mich—nicht—

と呼び、最後の花瓣が Liebt mich なりしとき、

Er liebt mich! (彼は余を愛す)

と呼びて、ハインリヒと手に手を握りし其時のマーガレットは如何に無邪氣可憐の少女なりしかを。彼女は先に父を失ひき、彼女は母の病に遇ふて、妹なる赤兒を養育するの勞を執る身なり。彼女は深窓の中に綺羅に包まれて生ひ立ちし身には非ず、又山海の珍珠、葡萄の美酒は日に三度は自然に卓上に現はるゝ者と思へる貴嬢にも非ず。彼女は母の爲に育兒の業を行ひたり。故にハインリヒに語りて曰く

Doch noch gewiss gar manche schwere Stunden.

Des Kleinen Wiege stand zu Nacht

An meinem Bett'.....

(それとも醒分つちい時も澤山ありますよ、
ちつさの籃は夜はわたしの廢産に置て、云々

彼女は夜半甘睡方に酣なるとき、妹の爲に醒まされて、赤兒を抱きて一室の中を徘徊するを苦とせざるに非ず。而もマーガレットは未だ浮世の波風に遭ひし事はなかりき。實に彼女はファウストの言の如く

Du hast gewiss das reinste Glück empfunden

清淨の幸福快樂を其中に感じて、今迄歲月を經來りしなり。云はゞ順風に帆を揚げて春の海を渡れる舟子なり、將來の命運に就きては一も考ふる所なし。理想の内に徘徊し、エデンの園に逍遙せるが如し。其心中には紛紜もなければ撞着もなし、憂慮なく考慮なく、而もサタンの毒氣が己の内に潜めるを知らざりしなり。彼女が歌ひし一片の

Ach dürft' ich fassen

Und halten ihn

Und küssen ihn

So wie ich wollt'.

なる歌は、肉慾なる悪魔が毒焰を吐く先驅となりぬ。彼女の戀人が云ひし言の葉

Ach, kann ich nie

Ein Stündchen ruhig dir am Busen hangen,

Und Brust an Brust und Seel' in Seele dringen?

は終に毒焰に彼女の身を焼かしむる源となりぬ。

彼女は春の風にひらくと飛び翔りて此處彼處に花の露を吸ふ胡蝶が毒汁を毒汁と知らずして吸ふが如く肉慾の毒蛇を肉慾と知らずして無邪氣なる戀愛の愉快の中に此大蛇の毒焰に罹りしなり彼女の心靈は衝突と知らずして終に肉慾と衝突しぬ。此衝突の一瞬间に理想は終に現實を離れて高く天上に騰り彼女の桃源エデンは忽にして消え失せぬ。跡に残りし者は何ぞ世界の名聞なり穢土浮世の義理なり。泉の邊に水汲むとき此少女が其友と語る言葉が己が情事を耻ぢてや、濫り勝なるは明に彼女が既に世間繫縛の重さを覺知せんとせるを示すに足らん。之に加ふるに彼女の母己が神とも君とも頼む一人の母は戀人の忍び來ん夜に其の眠を覺まさじとの一掬の藥品に眠覺めずなりぬ。社會の鎖枷は彼女の上に来らんとし良心の聲は稍高まりぬ。其兄は世の聞えに妹の上を思ひ終に妹が戀人の爲に暗中に刺されぬ。良心の怒は愈高く悪鬼の呵責は益す加はりて寺院の中に昨日迄は敬

虔に神前に跪きながら信心膽に銘じて開きし讚美歌の

Judex ergo cum sedebit,

Quidquid latet apparebit,

Nil inultum remanebit.

(其れ故、判官は彼の罪を撥かん、

隠す者は現はれん、

裁決を免るゝ者は一人もなからん)

との聲今は如何に其胸に潤み、其身を刺すの心地かしけん、

Quid sum miser tunc dicturus,

如何に慙むべき者と己を呼ぶべき

の一聲は彼女を悶絶せしむるに至りき。

春はいつしか過ぎ、花は泥にまみれて消え失せぬ。新綠色稍濃く、時はワルブルギスの夜に近きぬ。春の光に酔ひし人々は逝く春を止め得て、甘夢より覺めたらん如く、心に云ふべからざる深奥の悲痛を覺ゆる時となりぬ、

Der Sommer wird schwül, der Sommer wird heiss.

夏としなれば暑き身にしみ、夏は身を炎く

(ケルネルが詩)

の時に向へば、人の心は沈み勝となり、マーガレットの心は日に日に苦痛を加へぬ。加之己が身には何時しか戀人の種を宿せり。然れども世の耳目を憚り、且母の頓死、兄の横死に依りて、冥々の裡に人道の牢獄に投ぜられし少女は、亡き母に取りては初孫、我戀人にとりては長子なる己が血を分けし此兒も己に取りては仇に異ならず。狭き胸の中にとや此くと思ひ煩ひしマーガレットは、終に罪もなく怨もなき初生の兒を谷川に沈めつ。事顯はれて、彼女は終に獄屋の中に、神に捧ぐる御寺の鐘を聞きては、地獄に導く鐘の音と心を痛ましめざるべからざるに至りぬ。而も戀人は如何しけん、何時しか我を忘れしか、將又我を厭ひしか、音づれずなり、少女の心は轉沈鬱し、煩悶し、又自ら咎責苛叱して暫くも止まず。終に狂氣となり果てぬ。

マーガレットの戀人は彼女を忘れたるにあらねば、事の仔細を知りしより、直に魔メフストフェリースの力を借りて、之を救はんとて暗夜獄室の傍に忍びし時、狂女は狂態ながらも失せにし兒を憐み、自ら咎めて、其の昔繼母に虐殺せられ、父に食はれ、鳥と化せし子が、親を怨みしなる歌を歌ひてありき。戀人が救濟の苦心は終に水泡となり、狂女は如何にしても世に望を絶ちにけん、厭くまで獄を出づるを肯んぜず、全幅の誠を捧げて身と心とを神の裁定に任しぬ。人の誠は巖をも貫かん、罪惡の淵に沈み、悔悟の炎に身を焼ける狂女も其誠心は終に天上の裁定者に徹しけん。天上聲あり

Im gerettet!

(「彼女は」救はれたり)

と。少女が憐むべき罪惡は聖母の恕する所となり、其の虔信なる専念なる歸敬は其の受納する所となりき。而も戀人なるハインリヒは再ひ魔に誘はれて、獄屋の中より、己の爲に一身を盡滅せし戀しの少女

が、ハインリヒ、ハインリヒと呼ぶ聲を跡にして立ち去りぬ。

我れ駿河灣頭松籟濤聲の間に、甫めてゲーテが此神筆に接せし以來、此曲を讀む度に、いふべからざる悲痛を感じ、筆すべからざる憐情を催さざるなし。嗚呼浮世の風波が如何に荒さかを知らず、飄々春の花に戯るゝにも似たる青年の男女が、其無邪氣無經驗の浮きたる心に誘はれ、此の如き罪ならぬ大罪に陥る者果して幾何ぞ。始より淫逸放埒、獸慾の爲に驅られて不治の罪を心身の上にて得る者に向て、我は同情の涙を注ぐ能はず。然れども、若し世に少女マーガレットの如く、神に敬虔に、親に至孝に、兄を尊び、妹を慈しみ、婦徳に於て缺くる處なき可憐の少女にして、無垢純潔の愛情を其戀人に對して有する者が、其の無邪氣なるが爲に、而も間接には悪魔メフサストの毒心の爲に、重々の不幸に陥りし者ありとせば、我が涙に弱き情は其罪惡を罪惡なりとして此少女に對て無慘にも憎惡排斥の念を抱く能はざるなり。而も其犯せし大罪は、決して大罪たるを失はず、少女自己の良心が彼女を叱責すると同じく、

我も亦其罪惡を責めざるを得ず。是れ我が此篇を讀みて毎に大悲痛を感ずる所以にして、詩聖ゲーテが大技量をも此處に認むるなり。

然れども、少女マーガレットが最後は慈悲巨海の如き、聖母が攝取の光明中に融け去りにき。少女か無垢純潔の處女心を破滅して、叫喚無間の苦惱を纖弱なる乙女の上に與へし、罪惡の汚濁瘡痕は聖母が慈愛の救済に依りて痕跡を止めず洗ひ去られぬ。少女は世の羈絆より救ひ出され、物界の緊縛を解脱せられ了ぬ。彼女のエデンは舊に復しぬらん。現世にて憐むべき苦痛を蒙りし、マーガレットが魂は、天上にや生れけん、バラダイソスにや遊びけん。苦樂生死の相對境より救はれて、常樂不死の平等界に入りにし、彼女の樂國は我眼前に彷彿たるを覺ゆ。キリストに由りて來れる恩寵と救済も、彌陀の大悲心に發りにし即得往生、攝取不捨の大誓願も、皆此少女が最後に依りて現實にせられたり。使徒約翰が感得したる、人の光なる道の生ロモスも、哲士プラトーンが證得せし、超絶過境の觀念世界も、皆此少女の解脱に依りて、人の心中に影を止

め得ん。此に至りて詩人一片の神秘力は、終に聖賢一生の説法を凌駕するを見るなり。

嗚呼、若し心靈の善美と肉體の傾向が此く迄背反する事なかりせば、世は如何に憂苦なからん。又若し、世の現實と理想とが此く迄に相違かり、相衝突し易き者ならざらんには、人は如何に楽しく其生を送り得ん。若し詩人が此の如き悲慘痛恨の事を描寫せざりしならんには、我も亦熙々春光に酔ひて終に這般の悲劇に身を終らざりしを知らんや。又若し、全智全能の救濟者、大悲大悲の聖母が罪障疊重の凡愚を懲みて、大悲の涙を振ひ攝理の手を垂るゝ事なかりせば、罪惡の淵に沈淪せる、此憐むべきマーガレットは、如何の最後を遂げにけん。抑も又、一切罪業甚深の凡夫衆生は如何にして、生死を解脱して、光明常樂の國に遊ぶを得んや。ゲーテが描ける少女マーガレットの一生に對しては、我口も我筆も我が感情の千一を表する能はざるなり。

(廿八年五月)

現實と理想現世と詩人、

悲曲サッポーを論ず

人生悲慘の事多し。而して、其真相を尋ねれば、何れか理想と現實の衝突にあらざる。現實は束縛の境界なり、現世の事物一として他の局限を受け他の枷鎖に約せられざる者なし、人は此に於て常に不羈自由の境を思ひ、一切の繫縛を脱し諸の羈絆を離れんと冀ふ。彼は有限不自在の現實界の外に、常に悠々自適圓滿自由の理想を書て、之に向て動き之に據りて行ふ。理想は人をして天運約束の波濤を蹶て奮進せしむる燈明なり。苟も人にして些だも理想なからしめんか、彼は飄々波に漂ふ海月のみ、蠢々泥土に動く蠕虫のみ、六尺の骨格五十年の生命又何ぞ舞蟬、蟋蟀に異ならんや。理想は人生の靈火なり。此靈火を離れんか、人たる將何にか存せん。人は理想に依りて生命を維持す、然れども理想は現實に非ず、現實は常に理想に背反して之を防碍し、人は

如何にするも現實の外に逸出する能はず。理想は自身の影の如し、追ふに隨て捕ふべからず、自己の影を踏まんと欲して之に追従するも、何れの時にか冀望を達すべき。理想の魍魎は捉ふるに隨て復彼にあり、人は此の如き束縛に約せられて、純樂の理想を想ふ、豈苦悶なくして止まんや。人生毎に不満の事多く、詩人多く痛恨の聲を發するも此が爲のみ

夫れ詩人は人界に下れる天使なり、樞槽の間に伍する天馬なり。彼は形骸を此土に寓すと雖も、彼の精靈は天上のものなり。彼は天界の使命を帯びて天の聲を歌ひ、人生の觀念を發揮せんが爲に此土に下れるなり。其生命は一に天上理想界の甘露に養はる、而も其肉体的生命は粗身に育せられ、世間羈絆の間に長ぜざるべからず。彼も人なり、肉體の私慾に蔽はるゝ事なからめやは、又豈獨り社會與衆と離反して存し得んや。肉と靈の衝突が最も明に詩人の上に現はれ、現世と理想の對峙が最も多く詩人に來るも、實に此が爲なり。屈原は離騷を賦し、世

皆醉へり我獨り醒めたりと歌ひて汨羅に投じぬ、李白は万斛の憤懣を三斗の酒に遣て百篇を詠じ、餘韻數百年の後尙吾人の心腸に浸徹する者あり。嗚呼詩人は誠に「輓下」の天馬なりけり。

詩人バイロン、其昔女詩人サッポが淵に入りしと傳ふるロイカデアの岬を過き

And onward viewed the mount, not yet forgot,

The lover's refuge, and the Lesbian's grave.

Dark Sappho! could not verse immortal save

That breast imbued with such immortal fire?

Could she not live who life eternal gave?

If life eternal may await the lyre,

That only heaven to which Earth's children may aspire.

と歌ひ、過ぎにし其古を想ひて、悵惘禁ずる能はざりしを想はゞ、詩人ならずとも、誰か心情淒涼悲痛の思なからん。

嗚呼サッポ、彼は詩人として又リーラの妙手として、天界の片影を人界に傳へ、天上の聲を下界に歌ひし、天女神使なり。オリンポの祭に詩

樂の月桂冠を獲て、其名は星の如く輝ける金字もて高く神殿の楣間に刻せられ、列をオリンポの神々に伍せり。彼は既に地上の人にあらずりき、されど彼も亦人の肉體と人の感情を有する女詩人なり。彼は名も華麗なるフオンといふ壯年の爲に終に戀の奴となりぬ。彼女は人間として天使たるの使命と自己の理想界とを忘れ果てぬ、而も戀の運命は幸を人間たるサッポーに下さざりき。彼は失戀の人となり、失望落膽の極は終に彼をして自ら自己の天職を知り、人の戀、肉の愛に離脱すべきにあらずるを曉らしめたり。女詩人の理想界は到底現世と相容るべからず、彼は彼岸高遠なる天上觀念世界の光明を望み、此生を棄つる事、徹履の如く、ロイカデアの岬頭より身を海中に投じて去りぬ。是れ女詩人サッポーが一生として世に傳ふる所なり。其が歴史的眞偽は之を措き、此の傳説は誠に理想と現實との衝突を書き、詩人と現世との相容れ難きを表し得て餘ありといふべし。

埃國の詩人グリルバルツェル曾てサッポー入水の傳説に據り、一篇の悲

曲を作り、女詩人のフオンに對する戀愛に點するに一少女メリッタを以てし、一々の人物一々の感情に、理想と現實の乖反を點出したり。其神韻の渺として高き、讀む者をして聲なきにリーラの天樂を聞き、身は飄乎として觀念寂光の世界に遊ひ、紫雲を踏で暗憺たる下界を瞰下するの思あらしむ。悲曲の舞臺は希臘のレスボス島なり。時は正にオリンポ祭方に終れるの後なり。之に接すればヘラスの空氣に圍繞せらるゝの感あるも、彼が書きし所は實に最高の宗教が教へんと欲する所、深奥の哲理か暴露せんと欲して而も能はざりし所、而して一曲の悲曲は之を吾人の眼前に開展し來りて遺憾なし。

請ふ少しく我秃筆を驅りて、此一曲に於てグリルバルツェルが如何に女詩人の詩人的一生を理想化して、理想界と現世との對峙を如何に吾人の直覺に訴へたるかを叙せん。

女詩人サッポーはオリンポの大祭に詩樂の月桂冠を戴て歸り來れり。彼が治下にある音樂郷レスボス全島の人民は狂喜踴躍して之を迎ふ。

サッポーが胸中は己が名譽の月桂冠よりも、己が不朽の令名よりも、尙悦ばしきの情に充ちて歸れり。オリンポの會は彼に戀愛の好對象を與へ、彼は方に戀人なる少年フオンを獲て故郷に歸りたればなり。サッポーは、今や恰も爛熳たる櫻雲の間駘蕩たる暖風に浴して飛翔する胡蝶に似たり。詩人たる天職も、樂手たる賦性も、戀愛の爲に忘れられんとす、况や名聲利達に於てをや。彼は鳥人に己が戀人を介して曰く、

Ich liebe ihn! Auf ihn fiel meine Wahl!

Er war bestimmt in seiner Gaben Fülle,

Mich von der Dichtkunst wolkennahen Gipfeln

In dieses Lebens heitre Blütenkälter

Mit sanft bezwingender Gewalt herabzuziehen.

An seiner Seite werd' ich unter euch

Ein einfach stilles Hirtenleben führen,

Den Lorbeer mit der Myrte gern vertauschend,

Zum Preise nur von häuslich stillen Freunden

Die Töne erwecken dieses Saitenspiels,

(我は彼を戀ふ。我が撰擇は彼に當れり。彼は其豊富なる天賦に依り、

に榮ゆる詩樂の峯より我を此世の快潤なる榮えの溪谷に柔く迫り來る方もて引き下すべき人なりき。我は喜て月桂樹をミルテに代へて、質素なる靜穩なる牧者生活をなさん。只家内の靜なる歡樂を買はんが爲にのみ彼と共に汝等の間に此絃樂の響を發さん。)

女詩人は無常なる世の春に酔ひて、春の後には秋來ん事も、娑婆一生の外に常住の光明ある事をも忘れたり。彼女は退て椅子に憑りて戀人と私語喃々、

Und leben its ja doch das Lebens hochstes Ziel!

.....

Kalt, frucht-und dufflos drückt er das Haupt,

Dem er Ersatz versprach für manches Opfer.

.....

Und: ewig ist die arme Kunst gezwungen,

(mit ausgebreiteten Armen gegen Phaon)

Zu betteln von des Lebens Ueberfluss!

.....されど生き永らへんこと世にある最高の目途ならめ。.....

幾多の犠牲に對して報償を契りし月桂樹は冷かに果もなく香もなく頭

美術は今や彼女の眼には卑しむべき者厭ふべき者となれり。彼は戀人と共に快樂の望月の欠くる事なき光明中に美しき此世の生を送らん (Nur des Genusses ewig gleiche Lust des schönen Daseins uns vereint erfreuen) 外に些の冀望だもなかりしなり、戀人と共に住はん現世の外の理想界は全く消え失せしなり。

然れども戀は苦の種。戀の熾は常に人の胸に燃えて、心情に靜安を許さず。サッポーも亦戀愛の新しき生活に入りて、心緒稍もすれば亂れんとす。既に戀人を獲既に樂しき生活に入らんとし、何の不滿あるやを知らず。而もサッポーが胸は安からず。那方にか戀の聲を聞き、何れにか無愛の樂土を望みながら、其形は模糊として夢の如く、幻の如く、心は有耶無耶の間に驅馳して雲霧に包まれたらんに似たり。子の如く

を抑ゆ。……………哀れなる技藝は常に窘めらる、

〔腕を擡げてフアオンに對じ〕

世の贅澤より憐れを乞はん爲に

愛する婢メリッタと語るも、心爽ならず。彼は即獨りリーラを取りて芝草の上に立ち、愛の神なるアンロデテに歌て云ふ、

Goldenthronende Aphrodite,

Listenersinnende Tochter des Zeus,

Nicht mit Angst und Sorgen belaste,

Hocherhabe! dies pochende Herz!

……………

Und du kamst; mit lieblichem Lächeln,

Göttliche! auf der unsterblichen Stirn,

Fragest du, was die Klagende quäle,

Warum erschalle der Flehenden Ruf?

Was das schwärmende Herz begehre,

Wen sich sehne die klopfende Brust

Sanft zu bestrieken im Netz der Liebe;

Wer ist's, Sappho, der dich verletzt?

Flieht er dich jetzt, bald wird er dir folgen;

Verschmüht er Geschenke, er gibt sie noch selbst,